

20. 感染症情報センター

センター長 岡部信彦

概要

平成9年4月国立予防衛生研究所は「国立感染症研究所」と名称変更になり、それまでの感染症疫学部は発展解消し「感染症情報センター（初代センター長・井上栄博士）」が発足した。主な機能は、1) 感染症サーベイランスデータの集計、感染症情報の収集、解析、その情報の国民への提供、2) 外国の感染症機関との情報交換、3) 感染症集団発生の疫学調査、およびそれを実行する専門家の養成、4) 感染症予防制圧戦略の研究および提言、5) 不明病原体に関する検索並びに研究、技術伝達、等である。

平成11年4月に施行された感染症法では、サーベイランスシステムの強化が示されている。同法に基づいた基本指針の中には患者発生状況サーベイランスと同様に病原体に関する情報の収集、分析及び提供と公開も必要であるとされている。感染症情報センター(IDSC)は、国のサーベイランス事業の中で中央感染症情報センターとして位置づけられ、地方感染症情報センターならびに都道府県等の協力を得て、感染症法に規定された1-4類感染症（平成15年11月1-5類に類型が変更された）を中心としたサーベイランスを行っている。病原体情報については WISH Net、IDSC ホームページ (<http://idsc.nih.go.jp/index-j.html>)、病原微生物検出情報(IASR)を中心として、疾患の発生動向については感染症週報(IDWR: Infectious Diseases Weekly Report)などを中心として、収集された情報の迅速な還元と公開を行っているところである。血清疫学調査としては、感染症流行予測調査事業の中でこれを行っている。このデータ等を基礎とし、感染症対策の重要な一角としての予防接種のあり方についてのエビデンスを求めることもIDSCの重要な業務である。

感染症発生への適切な対応の一環として実地疫学の重要性が理解されつつあるが、これにかかわる人材の育成は急務である。感染研では業務の一つとしてこの人材教

育（実施疫学調査専門家養成コース(FETP)）が行われているが、研修実施の主体はIDSCが行っている。

平成14年4月より感染症情報センター第五室、第六室が村山庁舎に新設され、第五室においては細菌、第六室においてはウイルスについて、自治体における病原体検査の研修等を行い、また病原体検査に関する情報の収集、検査法の開発等を行うようになった。

情報センターは現在以下の6室で分担し、業務研究を行っている。

第一室（感染症対策計画室）

国内外における感染症の流行、集団発生・異常集積時の疫学調査、感染症対策のための計画立案とそのための研究などを行っている。ことに積極的疫学調査、これに関わる感染症実地疫学専門家の養成を行っている（Field Epidemiology Training Program）。院内感染対策も一室のテーマとしている。

第二室（感染症情報室）

地方感染症情報センターならびに都道府県等の協力を得て国内感染症サーベイランスデータの収集・分析、及びその結果の還元と提供及びそのための研究を行っている。

第三室（予防接種室）

感染症流行予測調査事業の一環として行われている血清疫学調査の立案と実施、現行予防接種の効果と副反応に関するモニタリング、これらの結果の公表と広く一般への情報提供、予防接種対象疾患の感染症として人に与える影響（disease burden）に関する調査研究、及び今後の我が国における予防接種の有用性に関する総合的研究を行っている。また感染症研究所として行われている国内血清銀行の管理を行っている。

第四室（病原診断室）

他の部の所管に属さない病原体に関すると思われる原因不明疾患の微生物学的検査、レファレンス、病原診断のための方法の開発を行っている。

第五室（細菌研修室）

細菌性疾患の検査に関する情報の収集・解析、情報提供を行っている。また国内外の関連機関と連携し、公衆衛生における細菌検査の技術向上・標準化等を支援している。公衆衛生に携わる公的機関の職員を対象に細菌検査に関する講習の立案・遂行、新規検査法の研究などを行っている。

第六室（ウイルス研修室）

ウイルス性疾患の検査に関する情報の収集・解析、情報提供を行っている。また国内外の関連機関と連携し、公衆衛生におけるウイルス検査の技術向上・標準化等を支援している。公衆衛生に携わる公的機関の職員を対象にウイルス検査に関する講習の立案・遂行、新規検査法の研究などを行っている。

各室の業務、研究、作業は、独立した個別のテーマもあるが、その多くは各室のスタッフが、それぞれが重なり合い、協力し合いながらテーマ別に集合して取り組んでいることが多い。したがってそれぞれの業務・研究・行政等について各室別に業務研究内容を表すのではなく、本年報ではその内容ごとに情報センターの1年間の活動内容を記した。詳細については以下それぞれの項目別に記されている。

なお、岡部センター長は以下の委員の委嘱を国より受け、情報センター業務・研究の結果、成績などを背景として国における感染症対策の検討に参画した。

厚生労働省健康危機管理調整会議委員

厚生労働省厚生科学審議会臨時委員

（感染症分科会員）

厚生労働省薬事・食品衛生審議会臨時委員

（医療機器・体外診断薬診断部会員）

厚生労働省薬事・食品衛生審議会臨時委員

（食中毒部会員）

厚生労働省疾病・障害認定審査会臨時委員

（感染症・予防接種審査分科会員）

厚生労働省疾病・障害認定審査会委員

（感染症・予防接種審査分科会員）

内閣府食品安全委員会専門委員

（肥料・飼料等専門調査会委員

緊急時対応専門調査会専門委員

微生物ウイルス専門委員）

農林水産省食料・農業・農村政策審議会臨時委員

厚生労働省地域保健対策検討会委員

医薬品医療機器総合機構専門委員

業績

1. 調査・研究

1-I. 感染症発生動向調査事業に関する研究

1-I-1. サーベイランスシステムの改善に関する研究

厚生労働省新興再興感染症研究事業として「効果的な感染症発生動向調査のための国及び県の発生動向調査の方法論に関する研究(主任研究者 谷口清州)を組織し、感染症サーベイランスの在り方について研究を行った。[谷口清州、重松美加、木村幹男、多田有希、山下和予、橋戸円、中瀬克己(岡山保健所)、田中政宏、岡部信彦]

1-I-2. 感染症発生動向調査に基づく注意報・警報システムおよび全国罹患数推計に関する研究

全数報告疾患のうち2類および4類の一部について、1999年4月から2004年12月までの報告情報の解析を行い、日本公衆衛生学会、国際旅行医学会などで発表し、情報の還元および今後の改善課題について検討した。定点報告疾患の全国罹患数の推計の求め方についての検討および従来の検討方法の再評価、性感染症における定点設定の妥当性についての検討を行った。[重松美加、谷口清州、橋戸円、橋本修二(藤田保健衛生大学)、村上義孝(国立環境衛生研究所)、永井正規(埼玉医科大学)、川戸美由紀(藤田保健衛生大学)]

1-I-3. 症候群サーベイランスの基礎的研究

バイオテロリズム、パンデミック、および大規模感染症の早期検知を目的とした症候群サーベイランスの導入を目指し、その対象の選定、効果的システムのあり方などに関する情報収集、意見交換、実験的サーベイランスシステムの構築などを基礎的研究として行った。その一環として、OTC(市販薬、大衆薬)の売り上げ、外来患者、および救急車搬送の過去のデータの解析を行い、サーベイランス対象としての有効性について評価し、暫定的にアラートシステムを構築した。その成果は、国内外の学会で報告した。関係者との頻繁な意見交換を重ね、その実用化に向けての検討を進めた。[大日康史、重松

美加、谷口清州、菅原民枝（筑波大学）、村田厚夫（杏林大学医学部）]

1 - I - 4 . 手術部位感染の疫学に関する研究

日本環境感染学会の学会事業である JNIS (Japanese Nosocomial Infections Surveillance) の一環として、院内感染の中でも発生の影響が特に大きい手術部位感染に関して、医療機関で行われるサーベイランスのデータを集積し集計を行い、各施設へのフィードバックを実施した。さらに、手術部位感染のリスク因子に関する研究的解析を行い、学会報告した。[森兼啓太、日本環境感染学会 JNIS 委員会]

1 - I - 5 . アメリカ合衆国の院内感染サーベイランスシステム事業への参画および研究的解析

財団法人ヒューマンサイエンス振興財団若手研究者育成活用事業による CDC の院内感染対策部門へ派遣を受け、アメリカ合衆国の院内感染サーベイランスシステムの改訂作業を行った。また、手術部位感染に関する同システムに集積されたデータを用いて、日米の発生動向の相違や発生のリスク因子に関する検討を行ない、学会報告を行った。[森兼啓太、Teresa Horan (CDC)、Mary Andrus (CDC)、Jonathan Edwards (CDC)]

1 - I - 6 . 海外で感染した可能性のある症例報告の検討

発生動向調査の情報の解析をもとに、海外での感染が推定される例の多い感染症の最近の動向、報告における問題点、推定される宿主要因の変化などにつき検討し、国内外の学会において報告した。[重松美加、山下和予、岡部信彦]

1 - I - 7 . 性感染症 (S T D) 発生動向調査の評価と解析

現行の S T D 発生動向調査に関して、定点の妥当性等を含め、その信頼性を調査研究するとともに、わが国の近年の S T D の最近の動向を解析した。[橋戸円、中瀬克己]

1 - II . パンデミック、バイオテロ、公衆衛生対策に関する研究

1 - II - 1 . 新型インフルエンザのパンデミック対策に関する研究

(1) 数理モデルを用いて、新型インフルエンザの被害を予想し、公衆衛生的対応を評価、検討した。個人の日常の移動パターンを組み入れた individual base model を開発し、休校や地域封鎖の影響について評価し、その成果を WHO の会合で報告した。[大日康史、谷口清州]

(2) 国内の実践的パンデミック対策計画を確立するため、世界各国の指針、行動マニュアルなどの情報を収集、分析、評価し、WHO チェックリストの翻訳および各項目についての国内状況の評価を開始した。[谷口清州、重松美加、森兼啓太、中島一敏、大日康史、田中政宏、砂川富正]

1 - II - 2 . 高病原性鳥インフルエンザウイルス対策の調査研究

厚生労働省特別研究事業「高病原性鳥インフルエンザウイルス対策の調査研究(主任研究者 谷口清州)」の研究活動として、ベトナム共和国ハノイ、ホーチミン市において、現地保健省、国立衛生疫学研究所、国立小児病院、ホーチミン・パスツール研究所などを訪問し、鳥インフルエンザウイルス感染症の流行現状に関する情報収集および各分野の専門家との意見交換を行った。また、ベトナム国立衛生疫学研究所との今後の協力と情報交換を行う可能性および、ホーチミン・パスツール研究所との協力関係を維持するための協議、さらに、日本政府による BSL レベル 3 実験室の無償供与に関連した、日本の技術協力の必要性についてのベトナム政府の見解についての情報収集を行った。[谷口清州、田中政宏、森兼啓太、中嶋建介、川名明彦(国立国際医療センター)、工藤宏一郎(国立国際医療センター)]

1 - II - 3 . バイオテロ(天然痘)の被害予想と公衆衛生的対応の評価

数理モデルを用いて、バイオテロの被害を予想し、それに対する公衆衛生的対応を評価、検討した。その成果は、論文として報告した。また、天然痘ワクチンの科学的備蓄規模と使用に関する研究班(主任研究者 蟻田功)の研究として日本における備蓄量の検討を行った。[大日康史、谷口清州]

1 - II - 4 . 国際保健規則および国際的感染症ネットワークの研究

大規模感染症発生時における行政機関、医療機関等の間の広域連携に関する研究班(主任研究者 大久保一郎)の研究の一環として、IHR のアルゴリズムについての検討を行うとともに、その妥当性について基礎的な検討を行った。[大日康史、重松美加、谷口清州]

1 - III . 感染症の疫学、統計等に関する研究

1 - III - 1 . インフルエンザによる超過死亡の評価

人口動態調査の月別全死因死亡者数のデータから、インフルエンザ流行の我が国の人口動態に与える影響を、「感染研」モデルを用いてインフルエンザによる超過死亡を推定し検討した。比較的大きな流行を経験した2002/03 シーズン(推計患者数 1,450 万人、超過死亡 11,215 人)に比べ、2003/04 シーズンは流行の規模は中等度で、患者数は約 923 万人、インフルエンザ関連死亡迅速把握からのデータによる超過死亡も 2 月だけにみられ、2,400 人と非常に少なかった。この結果は、病原微生物情報 vol.25, No.11, pp.288-286, 2004 で情報還元した。2004/05 シーズンは、3 月を越えて患者報告がみられ、推計総患者数および超過死亡ともに、再び増加することが見込まれる。[大日康史、重松美加、谷口清州]

1 - III - 2 . インフルエンザ関連死亡迅速把握に関する研究

14 大都市から提供されるインフルエンザ関連死亡(インフルエンザ及び肺炎死亡)数を用い、「感染研」モデルと同種の超過死亡推定モデルを適用し、各都市ごとの週単位の超過死亡を推定し、迅速な情報還元を行った。迅速把握においては、約 2 週間の遅れで、2 ヶ月遅れの人口動態から推計した結果とよく関連した情報を提供することができ、インフルエンザにおける超過死亡の早期警戒に有用であると考えられた。昨年度に引き続き、データ入手後 3 日以内のウェブによる還元を実現した。[大日康史、重松美加、谷口清州、松岡静香、NEC、厚生労働省健康局結核感染症課、14 大都市・特別区衛生主幹部局]

1 - III - 3 . インフルエンザによる患者数の迅速把握(毎日患者報告)事業の解析と還元システムの構築

インフルエンザ定点 5,000 の 1 割弱に相当する約 500 の定点医療機関よりインターネットを利用し、インフルエンザ様症状で受診した患者数の報告を、毎日受けるシステムを構築。この情報をリアルタイムで統計学的処理し、推計罹患者数を推計したものをウェブ上で提供し、効果的な対策に役立つよう、インフルエンザの流行状況を早期に情報提供した。このデータは、休日やその前後の影響が非常に強く、そうした曜日効果を排除するアルゴリズムに関して検討を加えた。また、有志の医師によって運用されているインフルエンザの毎日患者報告である MLflu の運用に参加し、解析を行った。この成果は、国内外の学会で発表した。[大日康史、重松美加、谷口清州、砂川富正、西藤なるを(西藤こどもクリニック)、数理システム、厚生労働省健康局結核感染症課]

1 - III - 4 . インフルエンザワクチン需要予測

インフルエンザワクチンの生産本数を決定するために、世帯調査を実施し、そのコンジョイント分析から予測を行い、国の需要見通しへ反映した。[大日康史]

1 - III - 5 . 狂犬病対策の数理モデルの開発

獣医学部との共同で、狂犬病予防法の評価のための数理モデルを開発した。特に、野犬、飼い犬の間での拡散を視覚的にモデル化し、その上で、アニメーションとして表現した。研究成果は保健所、検疫所等関係部局に配布した。[大日康史、井上智(獣医科学部)]

1 - III - 6 . 中小規模施設での院内感染発生時の対応に関する研究

厚生労働科学特別研究事業「院内感染地域支援ネットワーク及び相談体制の改善・普及や、データベースおよびバックアップ体制の構築に関する研究(H16-医療-11)」において、「病院感染および病院内新興感染の制御のためのバックアップ体制に関する研究」分担研究班に参画し、院内感染やそのアウトブレイクの発生に際し支援を行う地域支援ネットワークや大学病院・研究機関・学会などの役割に関する研究を行った。[森兼啓太、大久保憲(NTT 西日本東海病院)、倉辻忠俊(国立国際医療センター)]

1 - III - 7 .実地疫学専門家養成プログラム(F E T P)
の評価・改善に関する研究

「感染症実地疫学専門家の機能及びネットワークに関する調査研究」(平成16年度厚生労働科学研究地域保健総合推進事業)において計画・実施された「FETP修了生に対するアンケート」を担当し、FETP終了後の人材・ネットワークの有効活用とその課題に関して研究をおこなった。[中島一敏、大山卓昭]

1 - III - 8 .「検疫感染症等死亡疑い死体対応マニュアル」についての研究

「大規模感染症発生時における海港検疫所と地方公共団体等との広域連携に関する研究」(平成16年度厚生労働科学研究新興・再興感染症研究事業)において計画・作成した「検疫感染症等死亡疑い死体対応マニュアル」に関して、調査票、接触状況調査指針、船長への指示等(英文を含む)を担当した。[ポール・キツタニ、大山卓昭]

1 - III - 9 . ENTER-NET への参加

腸管感染症に関する海外情報のネットワークであるENTER-NETに参加し、ヨーロッパ各国よりファックスおよびインターネットにより得られるサルモネラ、腸管出血性大腸菌O157感染事例および菌情報の迅速収集を行うと同時に、同組織に対しては、感染症情報センターで入手したわが国におけるこれらの菌の検出状況の提供を行い、国際情報交換の窓口となった。[岡部信彦、渡邊治雄(細菌第一部)]

1 - III - 10 . ビブリオバルニフィカスの魚貝類における実態調査

近年問題となっているビブリオバルニフィカス感染症の実態を把握するために5つの地研と協力して、毎月、魚貝類におけるビブリオバルニフィカス及び腸炎ビブリオの定量的なデータを収集し、解析を行った。[岡部信彦、田村和満(細菌第一部)、荒川英二(細菌第一部)、山本茂貴(国立医薬品食品衛生研究所)]

1 - III - 11 . エンテロウイルス重症感染症の疫学研究
厚生科学研究：重症エンテロウイルス脳炎の疫学的ウ

イルス学的研究ならびに臨床的対策にする研究(岩崎班)で実施した全国アンケート調査につき更に詳細に解析を行った。回収率は、都道府県別に差は認められなかったが、大学、国公立病院、子供病院の回収率が高かった。EV71による手足口病が流行した年は、重症化例が多く発症していた。重症化例は7月をピークに6-8月に多く発生していた。年齢は0歳、次いで5歳にピークがあり、2日齢から18歳に分布していた。男性は女性の1.7倍多かった。44.3%が集団生活を送っていた。入院日数は1~234日(中央値6日)で、21日以上長期入院症例は19名報告された。年齢群によって入院となった原因疾患の割合が異なっていた。[多屋馨子、鈴木葉子、大山卓昭、北本理恵、早川丘芳、丹生隆、大日康史、逸見佳美、鈴木里和、新井智、岡部信彦]

1 - III - 12 . 麻疹、風疹感受性人口に関する研究

2003年に0-59歳であった人の麻疹、風疹に対する推計感受性者は麻疹で約300万人、風疹で約1000万人であった。0-59歳であった人の風疹に対する感受性者は女性約380万人、男性約730万人と男性、特に成人男性に多く、女性のみ定期接種が実施されていた年代の男性はその他の年齢群より感受性者が多かった。成人男性への風疹感受性人口の蓄積から女性に対する風疹ワクチン接種がワクチンを受けていない男性の風疹罹患を予防していたことが推定された。[多屋馨子、新井智、佐藤弘、荒木和子、岡部信彦、担当都道府県ならびに都道府県衛生研究所]

1 - IV . 予防接種、薬剤等に関する研究

1 - IV - 1 . 水痘、流行性耳下腺炎、肺炎球菌による肺炎等の今後の感染症対策に必要な予防接種に関する研究

厚生労働科学研究費補助金新興・再興感染症研究事業「水痘、流行性耳下腺炎、肺炎球菌による肺炎等の今後の感染症対策に必要な予防接種に関する研究」(岡部班)の研究の一環として、水痘・帯状疱疹、流行性耳下腺炎に関する基礎、臨床、疫学的研究を実施した。

(1) 水痘、ムンプス

ア.水痘、ムンプスの重症化例に関する研究

平成16年1月~12月の1年間に、国内で水痘、ムンプスに関連して入院あるいは死亡、及び、水痘ワクチン、

おたふくかぜワクチンに関連して入院あるいは死亡した患者につき全国アンケート調査を実施した。その結果、30%回収段階における中間報告であるが、全国で数千人の水痘、ムンプスによる入院患者が存在し、5名が水痘で死亡していた。小児のみならず成人例も多く重症化していた。[多屋馨子、佐藤弘、丹生隆、新井智、荒木和子、森兼啓太、岡部信彦]

イ. 保育園における水痘、ムンプス流行に関する研究

保育園における水痘、ムンプスの発生状況ならびにワクチン接種率を検討し、保育園における両疾患の流行蔓延に関する対策研究を行った。保育園児における両ワクチン接種率は、全国で推計されている約20-30%より遙かに低く、10%以下の接種率であることが判明した。今後更に、対象を増やして検討予定である。[安井良則(堺市保健所)、藤井史敏(堺市保健所)、越田理恵(金沢市)、多屋馨子、岡部信彦]

ウ. 動物実験モデルによるムンプスウイルスの神経病原性に関する研究

哺乳ラット脳内接種試験(10^{2.0}pfu/dose)により、水頭症の程度、脳病理標本、平均生存日数、病理組織学的検査成績について検討した。[一戸貞人、斉加志津子、岡部信彦]

(2) 風疹

厚生労働科学研究費補助金新興・再興感染症研究事業(岡部班)、平原分担研究班の研究の一環として、風疹流行および先天性風疹症候群の発生抑制に関する研究を実施した。

ア. 風疹流行および先天性風疹症候群の発生抑制に関する緊急提言作成

本提言のうち、提言「風疹予防接種の勧奨」、提言「流行地域における疫学調査の強化」の章を担当し、これを作成した。[岡部信彦、多田有希、多屋馨子、中島一敏、砂川富正、田中政宏、安井良則、谷口清州、新井智、大日康史、大山卓昭、佐藤弘、重松美加、上野正浩、太田正樹、鈴木葉子、松館宏樹、山口亮]

イ. 風疹 Q&A、風疹予防接種申込書・予診票、風疹予防接種に関するガイドライン作成

上記3部作を作成し、感染症情報センターホームページ上に公開した。

<http://idsc.nih.go.jp/disease/rubella/index.html>[多田有

希、田中政宏、多屋馨子、岡部信彦]

ウ. 2003年の風疹地域流行の全体像把握調査(徳之島における風疹予防対策調査)

徳之島で認められた風疹の流行対策として、鹿児島県、鹿児島県衛生研究所、徳之島保健所と共同で、風疹の流行抑制に関する検討を行った。

感染症発生動向調査、出席停止状況、医療機関からの積極的な情報収集により風疹の地域流行を把握し、CRSの全体像の把握として、感染症発生動向調査の強化、聴覚障害調査(ABRスクリーニング)、小児先天性心疾患児の情報収集、小児先天性白内障児の情報収集、人工妊娠中絶の把握、風疹に対する感受性者及び予防接種状況の把握について検討を行った。[中島一敏、田中政宏、多屋馨子、多田有希、砂川富正、安井良則、谷口清州、新井智、大日康史、大山卓昭、佐藤弘、重松美加、上野正浩、太田正樹、鈴木葉子、松館宏樹、山口亮、岡部信彦]

(3) 日本脳炎

ア. 日本脳炎ワクチンとADEMに関する研究

日本脳炎ワクチン後ADEM症例が発症したことから、全国の小児科標榜病院約3000施設を対象に2003-04年に発生したADEMとその類縁疾患の疫学調査を行なった。現在症例集積中であるが、100例以上が報告されており、年齢、性別、発症月、原因疾患、ワクチン接種との関連、予後について解析中である。[宮崎千明、多屋馨子、岡部信彦]

(4) 水痘および流行性耳下腺炎の定期接種化の費用対効果分析

水痘および流行性耳下腺炎のDisease Burdenの推定に基づいて、定期接種化のための費用対効果分析を行った。成果は、国内学会等で報告した。[大日康史、菅原民枝(筑波大学)、多屋馨子、岡部信彦]

1-IV-2. トラベラーズワクチンに関する研究

国際医療協力研究委託事業「海外旅行者の健康管理及び疾病予防に関する研究班(岡部班)」で実施した調査について更に検討した。渡航からワクチン外来受診までの日数は平均56.7日であり、渡航までに1か月未満の者が多く、ワクチン接種期間に余裕がなかった。渡航予定期間は平均94.1日であり、長期渡航者はある程度余裕を持って受診しているが、長期渡航者であっても直前の受

診者がいた。[多屋馨子、橋本迪子、新井智、岡部信彦]

(1) 狂犬病

ア. 狂犬病のワクチン接種による拡大抑制効果の評価と対策の検討

イヌの狂犬病は流行している地域のイヌの 70% にワクチン接種を行なうことによって排除または防止できるとされている。しかしながら、その検討は全て野犬が高密度に生息した環境下での検討で、日本にはそのまま当てはめることができない。そこでそれぞれの事例の評価を基に日本においてどのような予防措置が必要か、狂犬病ワクチンの評価も含めて検討した。

[新井智、井上智(獣医科学部)、大日康史]

イ. 複数ワクチンの同時接種時の狂犬病ワクチンによる抗体価の上昇に関する研究

狂犬病ウイルスの glycoprotein に対する平均抗体価は、接種回数が増加するにつれて上昇し、2 回接種群が最も高い平均抗体価を示した。一回接種では抗体価の上昇が認められない接種者もいたが、2 回のワクチン接種により、ほとんどの場合で防御レベルと考えられる 0.5IU/ml 相当以上の抗体価の上昇が確認された。可能な限り 2 回以上の接種を実施することが望ましいと考えられた。他の不活化ワクチンとの同時接種での干渉作用は確認されなかった。接種期間が十分に確保できない場合には、複数のワクチンの同時接種も有効なワクチン接種方法であると示唆された。[新井智、橋本迪子、多屋馨子、岡部信彦]

(2) 破傷風

小児期に DPT ワクチンを接種していると考えられる 35 歳未満の年代においては接種前から破傷風抗体は維持されており、1 回接種で十分なブースター効果が認められた。35 歳以上の者については抗体を保有していない者が高率に存在しており、この年代以降の者に対する破傷風ワクチンは重要である。ワクチン接種前に抗体陰性であった者に対しては少なくとも 2 回接種が必要である。[多屋馨子、橋本迪子、荒木和子、新井智、岡部信彦]

(3) A 型肝炎

30 歳未満ではワクチン接種前抗体陽性の者はいなかった。1 回のワクチン接種で高率に抗体陽転を認めたものの、確実に陽転化するためには少なくとも 2 回の接種が必要である。複数ワクチンの同時接種であっても抗体

反応は良好であった。副反応は 102 回接種中 14 回で認められたが、いずれも軽微で重篤な副反応は認められなかった。[多屋馨子、橋本迪子、田中幸江、新井智、岡部信彦]

1 - IV - 3 . 麻疹、風疹ワクチンに関する研究

近年の年齢別麻疹、風疹、MMR ワクチン接種状況に関して検討した。1 歳児麻疹ワクチン接種率は、「1 歳になったらすぐ」をキャッチフレーズにした全国的なワクチンキャンペーンの効果により 2001 年 52%、2003 年 63.4% と上昇を認めた。2 歳児の接種率も 80% から 90% に上昇した。1 歳児風疹ワクチン接種率は、2001 年度 35%、2003 年 35% と変化なく低値であった。MMR ワクチンについては、接種世代のピークが 2003 年度 14-15 歳であり、接種率は約 40% であった。経過措置により風疹ワクチンが定期接種の対象であった 10 代後半から 20 代前半の年齢層における風疹ワクチン接種率は、この経過措置終了前後 2 年間で上昇していなかった。[多屋馨子、新井智、佐藤弘、荒木和子、岡部信彦、担当都道府県ならびに都道府県衛生研究所]

1 - IV - 4 . 混合ワクチンの品質確保に関する研究

厚生労働科学研究医薬安全総合研究事業(宮村班)の分担研究 2 年目として研究を行った。0 歳児の DPT ワクチン接種率は 30.4% と低く、百日咳、ジフテリア抗体保有率は 30% 台と低値であった。百日咳の抗体保有率が年齢と共に減少しないのは、年長児、成人層で百日咳菌の曝露を受けていることが示唆される。年長児、成人の軽症百日咳が乳児への感染源となることが報告されているため、対策が重要である。40 代以上では小児期に DPT ワクチンを接種していないため、破傷風の抗体保有率は 4% 台と著明に低値であった。破傷風の患者報告はほとんどが 40 歳以上であることを考慮すると、成人層での破傷風トキソイドの必要性が示唆される。小児期に受けた DPT ワクチン、DT トキソイド、DP ワクチンにより、20 年以上は抗体が維持され、現行のワクチンの有用性が示された。[多屋馨子、佐藤弘、新井智、荒木和子、丹生隆、北本理恵、岡部信彦、流行予測調査事業グループ(厚生労働省、山形、茨城、東京、福井、大阪、愛媛、福岡、宮崎の各都府県及びその衛生研究所)、武田直和(ウイル

ス第二部)、宮村達男(ウイルス第二部)]

1 - IV - 5 . ポリオワクチンの効果に関する研究

厚生労働科学研究新興再興感染症研究事業：ポリオ及び麻疹の現状とその予防接種の効果に関する研究(加藤班)の研究協力者として、ポリオウイルス感受性調査を昨年に引き続き実施した。[長野秀樹(北海道立衛生研究所)、沖村容子(宮城県保健環境センター)、水田克巳(山形県衛生研究所)、岩井雅恵(富山県衛生研究所)、山下照夫(愛知県衛生研究所)、岡本玲子(山口県環境保健研究センター)、近藤玲子(愛媛県立衛生環境研究所)、多屋馨子、佐藤弘、新井智、北本理恵、早川丘芳、岡部信彦、清水博之(ウイルス第二部)、宮村達男(ウイルス第二部)]

1 - IV - 6 . ワクチンの製造株の品質管理に関する研究

医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業(加藤班)の分担研究1年目として実施した。現行の予防接種後副反応報告ならびに予防接種後健康状況調査より、報告された副反応を解析し、予防接種後副反応報告に関しては、必要な検索が容易に実施できるようなデータベースファイルを作成した。予防接種後健康状況調査については、平成8-14年分を累積してワクチン別に健康状況の変化を集計した。予防接種副反応報告については、今回作成したデータベースファイルを用いることにより、ワクチン別、ロット別に副反応報告を迅速に集計、解析可能となり、新たなレイアウトを作成することにより、解析目的に応じた検索システムの作成が容易となった。今後シードロットシステムが導入された後は、現行の予防接種後副反応報告あるいは、別の報告システムを構築して副反応を収集し、このファイルに入力することにより、これまでのワクチンとの比較ならびに新しいワクチンの副反応解析が容易になると考えられた。[多屋馨子、岡部信彦]

1 - IV - 7 . 熱帯病・寄生虫症治療のための国内未承認薬の確保・供給

平成16年度から開始された創薬等ヒューマンサイエンス総合研究事業「熱帯病・寄生虫症に対する稀少疾病治療薬の輸入・保管・治療体制の開発研究」班(主任研究者:

名和行文)の主要な活動として、熱帯病や寄生虫症に対する治療薬剤で、国内で認可されていないが必要なものを許可を得て輸入し、全国22ヶ所の保管機関に配付し、それらの機関を通じて薬剤入手を可能にする体制を構築し、運営してきた。そして、これらの国内未承認薬へのアクセスを容易にすることを目的に、研究班のホームページを充実させた。また、平成16年度には医療従事者を対象とした研修会「輸入感染症・寄生虫症診療の最前線」を開催した。

平成14年度に発行した「寄生虫症薬物治療の手引き2003年改訂第5版」については、その後数回にわたり小規模な改訂を行い、研究班のホームページからPDF版でダウンロードできるようにしたが、現在「改訂第5.4版」に更新されている。[木村幹男、日谷明裕、宮村和夫]

1 - V . 病原体等の研究

1 - V - 1 . 日本脳炎ウイルス

(1) 日本脳炎ウイルス自然感染率の検索

日本脳炎ウイルス自然感染率の検索のために、血清銀行の血清および宮崎県で採取された血清を用いて日本脳炎ウイルス非構造蛋白質であるNS1に対する抗体保有率を検索した。その結果、2001年に採血された宮崎県、福岡県、山梨県、長野県、愛知県、秋田県、福島県、山形県の住人のNS1に対する抗体保有率は、全体で約4%であった。[新井智、早川丘芳、丹生隆、小西英二(神戸大)、山本正悟(宮崎衛研)、多屋馨子、岡部信彦]

(2) ブタとニワトリが近接して飼育されている環境での日本脳炎ウイルス感染状況の検索

ブタおよびニワトリが非常に近接して飼育されている環境で、ブタおよびニワトリでの日本脳炎ウイルス感染状況の推移を調査した。その結果、ニワトリもブタとともに感染は確認できたものの、感染ウイルス量は微量でウイルス分離できる量ではなかった。[新井智、多屋馨子、岡部信彦、大竹正剛(静岡中小試験場)、岩澤敏幸(静岡中小試験場)、堀内篤(静岡中小試験場)、池谷守司(静岡中小試験場)、鈴木滋(静岡中小試験場)、高崎智彦(ウイルス第一部)、沢辺京子(昆虫医科学部)]

(3) 蚊媒介性ウイルスのベクター要求性の解明と創薬探索に関する研究

蚊によって媒介されるウイルスのベクターステージの

生物学的意義およびウイルスライフサイクルにおけるベクターの重要性とウイルス生存への影響を解析した。解析には、日本で家畜に使用されている日本脳炎ウイルス生ワクチン株とその親株を用いた。ワクチン株3株、親株2株の合計5株の全塩基配列を決定した。塩基配列からワクチン株に共通のアミノ酸変異はわずかに1カ所のみで、1アミノ酸の変異が病原性やベクター内での増殖に影響を与えている可能性が示唆された。[新井智、高崎智彦(ウイルス第一部)、多屋馨子、辻正義(酪農大)、石原智明(酪農大)、倉根一郎(ウイルス第一部)、岡部信彦]

1 - V - 2 . 風疹ウイルス

(1) 国際的動向を踏まえた体外診断薬の品質管理に関する研究

厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業(竹森班)の研究協力として、風疹抗体検出キットの品質管理に関する研究を行った。風疹抗体測定において赤血球凝集抑制試験、酵素免疫法、ラテックス免疫比濁法による成績を比較し、赤血球凝集抑制試験の抗体価を基準とした場合の他法における測定値の評価の目安が得られた。[佐藤弘、多屋馨子、逸見佳美、岡部信彦、竹森利忠(免疫部)]

1 - V - 3 . ダニ媒介性疾患関連病原体の解析および疫学調査

ダニによる刺咬後、熱症状を呈するダニ媒介性不明熱疾患の疫学調査および解析を目的として、ダニ媒介性疾患の疫学調査を実施した。疫学調査地域は、ダニ媒介性疾患の日本紅斑熱の存在が確認されている島根県宍道湖周辺を対象とした。調査対象は、バベシア原虫、エルリキア、およびその他ダニによって媒介される可能性のある病原体を対象とした。その結果、宍道湖周辺の野鼠にバベシア原虫およびエルリキアなどの感染が確認された。[新井智、田原研司(島根県環境研)、板垣朝夫(元：島根県環境研)、辻正義(酪農大)、石原智明(酪農大)、岡部信彦]

1 - V - 4 . エンテロウイルス

(1) エンテロウイルスの同定法の検討

無菌性髄膜炎および不明発疹症の患者から得られた臨床検体からエンテロウイルスの分離同定および遺伝子診

断を行うとともに、エンテロウイルス検出同定法の検討を行った。

静岡県と宮崎県の患者から分離同定したエコー16型24株について、ウイルスゲノムの塩基配列の比較を行った。[荒木和子、多屋馨子、元明秀成(宮崎県衛生環境研究所)、岡部信彦]

(2) PCR法によるアデノウイルス血清型の同定

アデノウイルスの分離、同定には時間がかかるため、簡便で感度、精度とも高い検査法の開発が要求される。昨年に引き続き、PCR-制限酵素切断法(REA)およびマルチプレックスPCR法による血清型同定の試みを継続している。今回は、アデノウイルス眼感染症を迅速に診断するため、分離頻度の高い、アデノ3、7、8、19、37型に特異的なプライマーを作成し、マルチプレックスPCR法により、一回のPCR増幅のみで高精度な血清型同定法を開発した。[アディカリ アルンクマー、ウルミラ バニク、向山淳司、松野重夫、稲田敏樹、岡部信彦]

1 - VI . 学校等におけるウイルス性集団発生の防止法の確立に関する研究

日本学術振興会科学研究の研究班として、学校で集団発生を起こし、社会的に問題となっているノロウイルスの防止策に取り組んだ。[西尾治、藤本嗣人(兵庫県立健康環境科学研究センター)]

1 - VII . 局在性付着大腸菌の血清型と *eae* 遺伝子型について

わが国で下痢症患者または健常者から、またタイ国で患者から分離された局在性付着大腸菌の血清型と付着性に直接関与しているインチミンをコードしている *eae* 遺伝子の遺伝子型を調べた。遺伝子型はPCRの増幅産物を用いた Heteroduplex Mobility Assay (HMA)法で行った。わが国で分離される大腸菌は古典的な血清型に属するものが少ないこと、H血清型と *eae* 遺伝子型に相関があることがわかった。[伊藤健一郎、山崎貢(愛知県衛生研究所)、森屋一雄・諸石早苗(佐賀県衛生薬業センター)、八柳潤(秋田県衛生科学研究所)、倉園貴至(埼玉県衛生研究所)、蛭田徳昭(横須賀市衛生試験所)、Orn-Anong Ratchtrachenchai(タイ国保健研究所)]

1 - VIII . リアルタイム PCR (SmartCycler)による迅速診断法の開発

1 - VIII - 1 . 大腸菌

EPEC及びEHECの局在性付着に関する *eae* 遺伝子、腸管凝集性大腸菌の凝集性付着に関する *aggR* 遺伝子及び耐熱性腸管毒素 *astA* 遺伝子を対象として、TaqMan probe によるリアルタイム PCR 法を開発した。それぞれのプローブを異なる蛍光色素 (FAM/VIC/ROX) で標識することにより、1本のチューブで3種類の遺伝子を同時に検出することができる。[伊藤健一郎]

1 - VIII - 2 . チフス菌・パラチフス菌の薬剤耐性の検査

サイクリングプローブ法を用いて *gyrA* の変異部分にプライマーを設計し、それぞれの変異を明確に区別できる方法を確立した。サイクリングプローブ法は、RNAとDNAのキメラプローブとRNase Hを組み合わせた検出法で、遺伝子断片の特定配列を効率よく検出できる。

最初に野生株と同じであるかをスクリーニング試験して、蛍光が上昇すれば同じと判定できる。上昇しない場合は変異があることを示し、変異の部位の塩基の種類を判別する確認試験を行う。最近分離され細菌第一部に送付されたチフス菌・パラチフス菌を試したところ、シーケンスの結果及び薬剤耐性試験の結果と完全に一致した。[伊藤健一郎・広瀬健二(細菌第一部)]

1 - VIII - 3 . レジオネラ菌

レジオネラ属に共通する 16S rRNA 領域と *mip* 遺伝子の *Legionella pneumophila* に特異的な配列を対象として、TaqMan probe によるリアルタイム PCR 法を開発した。それぞれのプローブを異なる蛍光色素 (FAM/ROX) で標識することにより、1本のチューブで2種類の遺伝子を同時に検出することができる。[伊藤健一郎、倉文明・前川純子(細菌第一部)、佐藤卓(岩手県環境保健研究センター)]

2 . サーベイランス業務

2 - I . 感染症発生動向調査事業の実施および情報の還元

2 - I - 1 . 病原体情報の収集と月報・年報の作成

病原微生物検出情報事務局において、病原体情報センター業務として、オンラインによる報告票の収集、電算機処理、情報ファイル作成、作表、月報および年報の作成、配布に関する一連の作業が継続的に実施された。

(1)情報処理：2004年1月 - 2004年12月の検出病原体報告数は、病原菌については地研・保健所 9,792、検疫所 2,485、都市立感染症指定医療機関 500であった。ウイルス(リケッチア、クラミジアを含む)に関しては13,032件の検出報告をうけた。

(2)月報の編集：本年度中に病原微生物検出情報月報が12号(第25巻)および第25巻索引が編集・発行された。また、インターネットを介して毎月、病原微生物検出情報が国内外に提供された。

(3)年報の編集：病原体情報に関する年報は、欧文による2000年年報が、Jpn. J. Infect. Dis., 2001 Vol. 54 Supplement として編集・発行された。[山下和予、齊藤剛仁、赤塚昌江、加藤信子、野地元子、徳永真里子、木村幹男、ポール・キツタニ、岡部信彦]

2 - I - 2 . 感染症疫学情報の解析に基づく特集記事の作成

毎月1回の編集委員会で、特定の感染症を患者発生情報と病原体情報の両面から分析し、「病原微生物検出情報」の特集記事を作成した。掲載された記事は、2004年4月号：アデノウイルスと咽頭結膜熱、5月号：食品媒介寄生蠕虫症、6月号：腸管出血性大腸菌感染症、7月号：HIV/AIDS、8月号：性器クラミジア感染症、9月号：手足口病、10月号：溶血性レンサ球菌感染症、11月号：インフルエンザ、12月号：水痘、2005年1月号：ロタウイルス、2月号：髄膜炎菌性髄膜炎、3月号：百日咳である。[山下和予、齊藤剛仁、赤塚昌江、加藤信子、徳永真里子、野地元子、木村幹男、多田有希、岡部信彦、谷口清州、重松美加、多屋馨子、伊藤健一郎、西尾治、井上栄、渡邊治雄(副所長・細菌第一部)、寺嶋淳(細菌第一部)、池辺忠義(細菌第一部)、高橋英之(細菌第一部)、廣瀬健二(細菌第一部)、倉根一郎(ウイルス第一部)、岸本寿男(ウイルス第一部)、安藤秀二(ウイルス第一部)、井上直樹(ウイルス第一部)、宮村達男(ウイルス第二部)、田代真人(ウイルス第三部)、小田切孝人(ウイルス第三部)、荒川宜親(細菌第二部)、新谷三春

感染症情報センター

(細菌第二部) 蒲地一成(細菌第二部) 遠藤卓郎(寄生動物部) 川中正憲(寄生動物部) 小林睦生(昆虫医学部) 神山恒夫(獣医学部) 佐多徹太郎(感染病理部) 石井則久(ハンセン病研究センター) 山本直樹(エイズ研究センター) 石川直子(国際協力室) 中嶋建介(厚生労働省・国際協力室) 山本茂貴(国立衛研) 田中義枝(企画調整主幹) 中谷比呂樹(企画調整主幹) 倉田毅(所長) 吉倉廣(顧問) 中里栄介(厚生労働省) 滝本浩司(厚生労働省) 河村成彦(厚生労働省) 浅沼一成(厚生労働省) 猿田克年(厚生労働省) 田中剛(厚生労働省)]

2 - I - 3 . 感染症週報の発行

平成 11 年 4 月施行の「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」、および平成 15 年 11 月施行の一部改正の主旨のもとに、感染症週報の発行を継続しており、当感染症情報センターのホームページ上に PDF 版と HTML 版とで掲載している。

感染症週報には「発生動向総覧」以外に、「注目すべき感染症」としてその時々で問題となる感染症を 1~2 件取り上げ、詳細な解説を行い、「病原体情報」として、その時々で問題となる感染症の患者からの病原微生物検出状況を掲載している。

また、「速報」においては、主に地方衛生研究所から投稿される、国内で問題となったアウトブレイクに関する最新の記事などを掲載し、成田空港検疫所の協力で「海外感染症情報」のコーナーを設けて、最新の海外感染症に関する記事を紹介し、「感染症の話」においては所内外の協力を得て、感染症法に規定された疾患、あるいはそれ以外の疾患も取り上げて解説を行い、「読者のコーナー」においては、外部からの問い合わせのあった質問につき、掲載する価値があると判断されたものを多くの読者にも公開している。[岡部信彦、木村幹男、多田有希、安井良則、谷口清州、多屋馨子、重松美加、森兼啓太、齋藤剛仁、菊池仁(成田空港検疫所)、石井俊也(成田空港検疫所)、大竹由里子、松岡静香、加藤信子、中里篤、FETP 研修生 5 期&6 期、砂川富正、中島一敏、大山卓昭、田中政宏]

2 - I - 4 . 感染症発生動向調査事業年報 CD-ROM 版デ

ータ集(2003/1-2003/12)の発行

感染症法が施行されてからの感染症発生動向調査の確定データを迅速に還元するためには、時間のかかるコメントの作成を最小限にしてデータ集の形で発行するのが望まれる。このため、利用者がデータ処理をできるようにエクセルの表を中心として収録した CD-ROM 版(2003/1-2003/12)を平成 17 年 3 月に発行した。疾患の詳細分類、推定感染地毎の分類を行い、データの経年変化も収録した。[岡部信彦、木村幹男、谷口清州、多田有希、多屋馨子、安井良則、重松美加、FETP 研修生 5 期&6 期、加藤信子、進藤義宏、中里篤]

2 - I - 5 . 感染症発生動向調査事業年報 1999 年(4~12 月)・2000 年(冊子版)の編集

感染症法発生動向調査に基づく患者情報および病原体情報は、その迅速な還元を目的に、感染症法施行以降は CD-ROM 版データ集の発行を行っているところであるが、冊子での保存も望まれていた。このため、厚生労働省結核感染症課発行による「感染症発生動向調査事業年報 1999 年(4~12 月)・2000 年」冊子版の編集を行った。今後 2001 年以降についても順次発行予定である。[岡部信彦、木村幹男、多田有希、加藤信子、中里篤、大竹由里子、松岡静香、進藤義宏、安井良則、山下和予、赤塚昌江、齋藤剛仁、徳永真里子、野地元子]

2 - I - 6 . インターネット等による病原体情報の提供

(1) 病原体情報報告機関に対して、速報を還元するために主要病原体の動向を WWW-WISH の電子会議室の病原体情報フォーラムにアップロードした。また WWW-WISH の個別情報システムによる還元情報速報閲覧のために新しいデータのアップロードを毎日行った。

(2) IDSC ホームページの「病原微生物検出情報」のページに、オンラインで随時報告されるデータの追加・変更を反映させた速報グラフを更新・掲載した。地方衛生研究所などからの速報記事を随時掲載した。また、累積データに基づく統計表とグラフおよび病原体名、疾病名から検索できる月報特集記事索引を毎月作成し更新・掲載した。

(3) インフルエンザシーズン中、ウイルス第三部へのインフルエンザウイルス情報の転送と、WHO の FluNet

感染症情報センター

への日本の週別型別分離数データのアップロードを毎週行った。

(4) 地方衛生研究所と検疫所の検査情報担当者メーリングリストを整備し、毎月の予定についての連絡、バージョンアップやインフルエンザ検査担当者やSARS検査担当者への連絡に活用した。[齊藤剛仁、赤塚昌江、徳永真里子、野地元子、加藤信子、山下和予]

2 - . 感染症発生動向調査のシステムの改善

2 - II 1 . 感染症検査情報収集還元オンラインシステムの改良

平成12年1月より運用を開始した感染研・地研・検疫所間の感染症検査情報(病原体情報)コンピュータオンラインシステム Version4 について、不具合修正と機能追加のためプログラムの改善を行った。2004/05 インフルエンザシーズン用抗血清コードを追加した Version4.70 を平成16年10月に、さらに検出病原体コードなどを追加修正した Version4.71 を平成17年1月より運用開始した。またフルバージョンのCD-ROM版マニュアルを作成し各報告機関に配布した。[山下和予、齊藤剛仁、徳永真里子、加藤信子、赤塚昌江]

2 - II 2 . 感染症法に基づく発生動向調査の報告規準改定に関する技術的支援業務

2004年11月の感染症法改定に続き、最新の疾病情報、検査診断技術の進歩を反映し、よりの確に患者発生動向を把握するための報告基準改正を実現するために、各疾患別に再評価を実施し、科学的、医学的見地からの情報提供、および提言を実施した。[岡部信彦、谷口清州、重松美加、田中政宏、木村幹男、多田有希、多屋馨子、新井智、山下和予]

2 - III. 感染症発生動向調査事業に関する業務

2 - III - 1 . 感染症発生動向調査、各種疾患別情報および新着情報、鳥インフルエンザ関連緊急情報、インフルエンザ Q&A などのインターネットホームページへの掲載、更新、維持

感染症発生動向調査の解析結果、時系列グラフ、地図グラフをホームページ上に掲載し、定期的に更新、維持管理を行った。各種疾患別情報および新着情報、鳥イン

フルエンザ関連緊急情報、およびインフルエンザ Q&A などのページについても内容を検討し、HTML および PDF ファイル等の作成、維持管理を行った。[大竹由里子、松岡静香、安井良則、重松美加、森兼啓太、田中政宏、多田有希、木村幹男、加藤信子]

2 - III - 2 . 海外感染症情報の収集と評価

WER (WHO)、MMWR (米国 CDC)、Eurosurveillance Weekly (EU)、CDR Weekly (英国)、SCIEH Weekly Report (スコットランド)、CDI(豪州)、Lancet、N. Engl. J. Med.、 J. Infect. Dis.、 Clin. Infect. Dis.、 J. Travel Med. などや、電子メールでの ProMED、Outbreak Verification List (WHO、参加機関のみ) や TravelMed (国際旅行医学会、会員のみ)、あるいは、その他種々のウェブページ上での感染症情報を収集・評価し、必要な情報を関係機関に提供した。[岡部信彦、木村幹男、谷口清州、多屋馨子、多田有希、新井智、安井良則、重松美加、森兼啓太、大日康史、田中政宏、大山卓昭、砂川富正、齊藤剛仁、中島一敏、ポール・キツタニ、FETP 研修生 5期&6期]

2 - IV . 感染症流行予測調査事業に関する業務

2 - IV - 1 . 感染症流行予測調査報告書の作成

厚生労働省健康局結核感染症課及び感染研関係各部と共同で、平成15年度(2003年度)報告書を作成した。

2 - IV - 2 . 感染症流行予測調査結果速報の発信

平成16年度感染症流行予測調査のうち、A)インフルエンザ HI 抗体保有状況を11月26日から12月24日まで計3回、B)全国日本脳炎ブタ情報(HI 抗体保有状況)を6月30日~12月1日まで計17回速報としてホームページ上に公開した。C)麻疹、風疹、MMR ワクチンの年齢別接種率をホームページ上に公開した。

2 - IV - 3 . 感染症流行予測調査実施要領の作成

厚生労働省健康局結核感染症課と共同で、平成16年度版を作成した。

2 - IV - 4 . データバンク保存

感染症情報センター

2 - IV - 5 . オンライン入力システムの改訂、検証
都道府県からの結果送付用のシステムおよび集計システムを改訂、検証した。

2 - IV - 6 . 事務局業務

厚生労働省健康局結核感染症課，都道府県，都道府県衛生研究所，感染研関係各部との密接かつ円滑な連携を保つための業務を行った。[多屋馨子，新井智，佐藤弘，北本理恵，早川丘芳，丹生隆，荒木和子，岡部信彦]

2 - V. サーベイランス事業の支援

2 - V - 1 . 院内感染対策サーベイランス事業の支援

厚生労働省事業として行われている「院内感染対策サーベイランス」を支援する、厚生労働科学研究費補助金「薬剤耐性菌の発生動向のネットワークに関する研究」の分担研究班:「院内感染サーベイランスにおける解析結果の還元・提供に関する研究」および「手術部位感染症における効果的な感染症発生動向の把握と感染症リスク因子解析に関する研究」に対して横断的に担当し、解析結果のフィードバックに関するアンケート調査や、入力支援・データ提出・解析・フィードバックの流れを一元的に管理できるソフトウェアの開発に参画した。[森兼啓太、谷口清州、岡部信彦、荒川宜親(細菌第二部)、小西敏郎(NTT 東日本関東病院)、針原康(同)、フィンガルリンク株式会社、片岡穰(厚生労働省医政局指導課)、溝口達也(同)]

2 - V - 2 . 国内感染症集団発生事例に対する調査支援

-病原性大腸菌 O157 感染症広域集団発生事例(岡山県、香川県、石川県、福井県)
-施設内 V R E 集団発生事例(山口県山口市)
-施設内 V R E 集団発生事例(山梨県巨摩郡)
-施設内 V R E 集団発生事例(鳥取県米子市)
-施設内 V R E 集団発生事例(京都府京都市山科区)
-風疹の地域的流行事例(鹿児島県徳之島)
-施設内ノロウイルス感染症集団発生事例(広島県福山市)
[森兼啓太、田中政宏、砂川富正、中島一敏、多屋馨子、谷口清州、岡部信彦]

2 - V - 3 . 地方自治体における麻疹対策強化活動の支援

埼玉県さいたま市保健福祉局による、麻疹対策強化活動「はしかゼロ・マーチ」運動(2004年10月開始)に、同市対策会議の委員として麻疹サーベイランスの強化活動に関する協議運営に協力支援した。[田中政宏]
-沖縄はしかゼロプロジェクトの特別委員として全数報告制度などの運用に協力支援した。
[中島一敏、登坂直規、砂川富正]

2 - V - 4 . 国際的な感染症対策の枠組みに係わる技術支援

世界保健機関により行われている国際保健規則(IHR)の改正に関連して、その条文を技術的に検討し、作業部会にての議論を行い、また政府間調整会議で議論を行った。またバイオテロ対策やパンデミック対策において、G7+メキシコのGHSAGの会議に参加し、技術的な支援を行った。[田中政宏、重松美加、中島一敏、大日康史、谷口清州]

2 - VI . 感染症情報の収集、評価及び予防対策の策定

2 - VI - 1 . 生物学的製剤に起因する感染症に関する安全性関連情報収集業務

移植片、輸血、タンパク製剤など生物由来の医療関連材料によると考えられる感染症を、早期に把握し、情報提供することにより、健康被害の拡大を防ぐことを目的とした情報収集と、そのためのシステム構築を開始。昨年度に引き続き、2000年以降の海外の文献情報を遡り検索し、関連情報をデータベース化した。2003年9月以降は、報道機関ニュースと、各国および国際的機関の公式情報を毎日、国内外の文献情報を定期的に収集し、生物学的製剤との関連を検討評価し、データベースに蓄積した上で、事務局として、生物学的製剤由来感染症評価検討委員会へ提出し、その調査、対応の緊急性を評価し、関係諸機関へ報告した。また、情報検索および蓄積・検索データベースのシステム開発に関与し、試験稼働を開始した。[谷口清州、重松美加、多屋馨子、柴田博子]

2 - VI - 2 . SARS に対する情報収集と対策

SARSの再流行を懸念し、引き続きWHO、CDCを始

め各国が随時発出する情報を常時監視し、情報収集とその評価、および適宜日本語に翻訳し、迅速な提供に努めた。感染症情報センターのホームページには、医療従事者のみならず国民からのニーズの高い「SARSに関するQ&A」や、検査室対応をはじめとした各種指針、および前述の翻訳文（約100文書）を掲出し、広く情報提供に努めた。また、所内および他研究所における実験室内感染の防止のための指針作りや、緊急時連絡体制の確立に対し、助言と協力を提供した。リスクコミュニケーションとして、情報センター長を中心に報道機関への毎週、あるいは隔週のブリーフィングを行い、社会への正確で迅速な情報の提供と、科学的知識の普及に努めた。[重松美加、森兼啓太、田中政宏、大日康史、多田有希、安井良則、松岡静香、FETP5期&6期、砂川富正、中島一敏、ポール・キツタニ、大山卓昭、谷口清州、岡部信彦]

2 - VI - 3 . トリインフルエンザの汎アジア的発生に対する情報収集とヒト流行への予防的対策

2003 年末からアジアで発生している鳥インフルエンザ（H5N1）の、ヒト感染が確認されたベトナムにおける疫学情報や実験室診断に関する情報収集を行い、現地担当者と情報交換を実施し、感染拡大防止の対策などの情報提供、技術支援を行った。WHO、OIE（国際獣疫事務局）や各国衛生主管部局より発信された情報を整理し、随時日本語に翻訳（約150文書）して情報センターのホームページに迅速に掲出し、国民の情報ニーズに対応するとともに、定期的なメディア・ブリーフィングの実施など、リスクコミュニケーションの向上を図った。並行して、日本で鳥インフルエンザからのヒトでのパンデミック発生に備えた対応計画の策定のための情報収集と、既存の各国の計画の評価を行った。[重松美加、森兼啓太、田中政宏、大日康史、砂川富正、中島一敏、ポール・キツタニ、大山卓昭、FETP5期&6期、谷口清州、岡部信彦]

2 - VI - 4 . インフルエンザ流行期におけるインフルエンザ総合対策（強化サーベイランス、電話、メール問い合わせおよびウェブ情報の提供）

厚生労働省インフルエンザ総合対策の一環として、インフルエンザの発生動向調査に基づく注意報警報システ

ム、インフルエンザ様疾患の迅速報告システムとインフルエンザ関連死亡迅速把握システムを運用、解析、情報提供するとともに、インフルエンザのQ & Aを更新し、医療従事者以外の要望の強い情報も提供した。インフルエンザホットライン業務を12月から3月までの平日日中時間帯に実施した。[岡部信彦、谷口清州、多屋馨子、重松美加、森兼啓太、田中政宏、大日康史、松岡静香、木村幹男、多田有希、安井良則、新井智、荒木和子、大山卓昭、砂川富正、中島一敏、FETP研修生5期&6期]

3 . 国際協力関係業務

3 - I . 国際的調査協力及び支援

3 - I - 1 . 国際的感染症集団発生事例に対する調査協力
(1) アジアにおける鳥インフルエンザの感染拡大をうけて、ベトナムを統括するWHOから現地情報収集・解析にあたるスタッフ派遣の要請があり、これに応じて約1ヶ月ずつ6名をWPROへ、1名をWHO本部へ派遣し、感染拡大防止活動へ協力した。[山口亮、神垣太郎、松舘宏樹、三村敬司、太田正樹、森山和郎、小林幹子]

(2) 中国におけるSARS（重症急性呼吸器症候群）の実験室感染事例に対し、WPRO（国際保健機関西太平洋事務局）からの要請を受けて、国際専門家調査団の一員として、院内感染対策、疫学調査、診断検査法の検証、実験室内バイオセーフティ対策について、北京市および安徽省合肥市、淮南市における調査協力を行った。[重松美加]

(3) 中国におけるポリオ対策の支援のため、国際チームの一員として現地にて技術的な協力を行った。[上野正浩]

3 - I - 2 . 大規模災害における国際的支援

(1) 2004年12月26日にスマトラ沖で発生した大規模地震と、それに続く津波により、タイ、インドネシア、スリランカ、モルジブ、インドなど、周辺の沿岸部を中心に多くの被災民の発生を含む深刻な被害が生じた。特に、被害の大きかったバンダアチェ州（インドネシア）の被災民救済のために、日本政府が派遣した国際緊急救援隊の医療チームへ参加し、長崎大学熱帯医学研究所と共に、被災地における今後の感染症の流行可能性の調査と評価を行い、今後の対策に関して現地州政府、インド

感染症情報センター

ネシア保健当局、WHO および関連国際機関への情報提供および提言を行った。

[田中政宏、重松美加、高木正洋(長崎大学熱帯医学研究所)、砂原俊彦(長崎大学熱帯医学研究所)、石田正之(長崎大学熱帯医学研究所)]

(2) 2004年スマトラ島沖地震・津波災害後の感染症予防対策を実施しているWHOチームに対し、WHOの要請を受けて、インドにおけるWHOの南東アジア地域事務局(SEARO)およびジュネーブにおけるWHO本部(HQ)で各1名ずつ、感染症対策の短期アドバイザーとしての技術的・専門的支援を行った。[ポール・キツタニ、小林幹子]

(3) 2005年3月、各省庁からの33名で構成された、スマトラ沖大地震及びインド洋津波被害政府調査団に参加し、タイ及びスリランカを訪問、感染症関連のアセスメントを行い、日本の長期支援に関する提言を行った。

[中島一敏]

3-II. 国際研修

3-II-1. 感染症管理指導者研修

Immunization schedule and measles/rubella control in Japan.2004.2.5.

[多屋馨子]

3-II-2. 海外からの来所者への感染症情報センターの活動および感染症対策に関する情報提供と広報

国立国際医療センター海外研修生、JICA 留学生、各国保健医療および政府関係者などの来所時に、感染症情報センターの活動、国内感染症の発生動向、国内および国際連携による感染症対策の現状、SARSを含む国際感染症対策、パンデミック対策などについての情報提供、広報業務をおこなった。[岡部信彦、谷口清洲、重松美加、森兼啓太、田中政宏、砂川富正、中島一敏、木村幹男、多田有希、多屋馨子、齋藤剛仁、山下和予]

4. 研修業務

4-I. 感染症危機管理およびそれに関わる人材養成(実地疫学専門家養成プログラム)に関する業務

4-I-1. 全般実施状況

FETPの実施は6年目となり、平成16年4月、6期生

9名(山口亮、三村敬司、松舘宏樹、森山和郎、神垣太郎、登坂直規、小林幹子、鈴木葉子、太田正樹)を迎えた。平成17年3月には5期生(上野久美、上野正浩、増田和貴)が研修終了した。また平成13年度からDr John Kobayashi (Washington University, 米国)に長期コンサルタントを依頼し、感染症疫学研究、地方自治体との積極的疫学調査などが充実した。

4-I-2. 感染症集団発生事例に対する実地疫学調査協力

平成16年度において、実地疫学専門家養成プログラム(FETP)は、以下の感染症集団発生事例に対して、地方自治体からの要請を受けて、調査協力を行った。

-病原性大腸菌O157感染症広域集団発生事例(岡山県、香川県、石川県、福井県)

-施設内VRE集団発生事例(山口県山口市)

-施設内VRE集団発生事例(山梨県巨摩郡)

-施設内VRE集団発生事例(鳥取県米子市)

-施設内サルモネラ菌感染症集団発生事例(茨城県つくば市)

-原因不明の急性脳症集団発生事例(新潟県、秋田県、山形県)

-施設内VRE集団発生事例(京都府京都市山科区)

4-I-3. 研修活動

FETPのトレーニングの一環として、初期導入研修(John Kobayashi, Richard Dicker, Piyanit Tharmaphornpilas; 4月)とともに、国際的なインフルエンザ予防対策およびSARS対応(Timothy Uyeki; 5月)、食品・水を介する感染症(Robert Qick; 8~9月)、院内感染(Mike Bell; 10月)、サーベイランスの理論と実際(Julia Fitzner, Conchy Rocés; 3月)に関するセミナーを開催した。

4-I-4. 教育研修経験

教育経験のための研修として、全国感染症危機管理研修会での講義、地方自治体の感染症危機管理研修会(埼玉県、東京都、神奈川県、鹿児島県、新潟県、熊本県、青森県、岩手県、秋田県、三重県)での講義・討論をおこなった。

感染症情報センター

4 - I - 5 . 感染症疫学研究

平成 15 年度に研修終了した 5 期生が以下の長期プロジェクト研究発表をおこなった。

- 「感染症発生動向調査のデータを利用した麻疹流行の予測」(上野久美)

- 「2004 年京都府における鳥インフルエンザ事例の疫学調査」(上野正浩)

- 「腸管出血性大腸菌感染症 (E H E C) における感染危険因子の検討」(増田和貴)

4 - I - 6 . 感染症サーベイランス活動

毎週ごとに収集されるサーベイランス報告対象疾患の情報を監視・解析し、必要に応じて地方自治体とともに公衆衛生的介入を実施した。

- レジオネラ症増加に対する注意喚起

- H I V / A I D S 発生動向に基づいた提言

- 風疹症例増加に対する予防接種推奨とそれに伴う先天性風疹症候群の対応、等

4 - I - 7 . 感染症情報の還元

感染症サーベイランス、感染症集団発生事例に対する実地疫学調査協力などで得られた情報を病原体検出情報(月報)感染症週報などを通じて一般住民、公衆衛生従事者などに還元した。また、インフルエンザ流行時期(10月~3月)には、一般住民からのインフルエンザに関する問い合わせ、公衆衛生・医療関係者からの SARS、鳥インフルエンザ等に関する問い合わせに対応した。[岡部信彦、FETP5 期&6 期、感染症情報センタースタッフ一同]

4 - II . 国立保健医療科学院による研修の実施

4 - II - 1 . 特別課程ウイルスコース

国立保健医療科学院による特別課程ウイルスコースとして、平成 16 年 9 月 14 日から 10 月 15 日に感染研村山分室で研修会を実施した。ウイルス学、免疫学および分子疫学等について体系的な理解と新しい知見・ウイルス診断技術を習得することを目的とし、地方衛生研究所でウイルスに関する業務につく 25 名が参加した。本研修は、感染症情報センターをはじめ、感染研各部署、厚生労働省結核感染症課、愛媛県立衛生環境研究所、静岡県

環境衛生科学研究所、群馬県衛生研究所、鹿児島県環境保健センター、兵庫県立健康環境科学研究所センター、広島市衛生研究所の協力を得て遂行された。[西尾治、伊藤健一郎]

4 - II - 2 . 特定研修、新興再興感染症技術研修

国立保健医療科学院による特定課程新興再興感染症技術研修として、平成 16 年 11 月 8 日から 11 月 12 日に、感染症研究所村山分室で研修を行った。本研修は、地方衛生研究所において細菌検査業務に従事するものを対象として、細菌感染症の現状に対応した新しい技術及び知識の習得を目的としている。レジオネラ 細菌性呼吸器感染症 ボレリア・レプトスピラを中心として、5 日間行った。参加者は、地方衛生研究所 11 名・中核市保健所 4 名の合計 15 名であった。[伊藤健一郎・西尾治、川端寛樹・小泉信夫・池辺忠義・高橋英之・倉文明・前川純子(細菌第一部)、杉山和良(バイオセーフティ管理室)、原田誠(名古屋検疫所名古屋空港検疫支所)、黒木俊郎・鈴木理恵子・渡辺祐子(神奈川県衛生研究所)、河野喜美子(宮崎県衛生研究所)、松崎充宏(日本海事検定協会理化学分析センター食品衛生チーム)]

4 - III . 危機管理研修会、健康危機管理保健所長等研修会

4 - III - 1 . 危機管理研修会

平成 16 年 9 月 16 日~17 日、内閣府食品安全委員会、厚生労働省各部署、農林水産省の協力の下、今年度は、鳥インフルエンザの対策、感染症ネットワーク、種々のアウトブレイク調査報告などを中心に、地方自治体職員約 120 名の参加を得て、平成 16 年度の感染症危機管理研修会を行った。[感染症情報センタースタッフ]

4 - III - 2 . 健康危機管理保健所長等研修会

第 1 回から第 4 回健康危機管理保健所長等研修会において、SARS、鳥インフルエンザ、ウエストナイル熱および脳炎など、新興・再興感染症の動向を中心とした感染症の現状と対策、対応について講義を行った。[谷口清州、重松美加]

4 - IV . 希少感染症診断技術向上事業に関する業務

感染症情報センター

平成16年度は対象疾患として、食品媒介性細菌感染症、赤痢アメーバ、クラミジア、破傷風、ガス壊疽、E型肝炎、ポリオ、高病原性鳥インフルエンザ、SARSが取り上げられた。研修会は平成17年2月、当感染研で2日間開催され、56地研が参加した。それぞれの疾患は細菌第一部、細菌第二部、獣医科学部、ウイルス第一部、ウイルス第二部、ウイルス第三部、寄生動物部、感染症情報センターの協力により行われた。また、本事業の一環として、レファレンスセンター（カンピロバクター、エンテロウイルス、レジオネラ、寄生虫、アデノウイルス、ジフテリアおよび百日咳、レンサ球菌）の運営が国立医薬品食品衛生研究所、東京都健康安全研究センター、感染研ウイルス第二部、細菌第一部、細菌第二部、寄生動物部、感染症情報センターおよび各地方衛生研支部の協力でなされた。[稲田敏樹、橋戸円、倉根一郎（ウイルス第一部）]

4 - V . その他の研修の実施

4 - V - 1 . 国立感染症研究所安全連絡協議会研修

風疹、プール熱等の現状と対応について.2004.9.28.
[多屋馨子]

4 - V - 2 . インフルエンザ研修

厚生労働省血液対策課主催の都道府県インフルエンザワクチン担当者会議において、インフルエンザを含む感染症の動向について、研修を実施した。[多屋馨子]

4 - V - 3 . 検疫所による感染症検査技術研修会の実施

医薬食品局検疫所業務管理室の依頼により、検疫所を対象とした平成16年度感染症検査技術研修会に参加した。6月30日から7月1日にかけて横浜検疫所輸入食品・検疫検査センターで開催された。参加者は空港検疫所(6)、輸入食品・検疫検査センター(2)を含む検疫所から派遣された12名であった。担当したのは赤痢菌の迅速診断法で、リアルタイムPCRの実習と講義を行った。[伊藤健一郎、原田誠(名古屋検疫所名古屋空港検疫支所)]

4 - V - 4 . バイオセーフティ研修

バイオセーフティ室を支援する形で、中国における

SARS 実験室内感染を中心とした事例を踏まえた講義を行った。[重松美加]

4 - V - 5 . 各地院内感染、SARS、パンデミック対策などのセミナー

[岡部信彦、感染症情報センタースタッフ一同]

5 . その他

5 - I . 情報提供及び広報活動

5 - I - 1 . 電話、メールによる問い合わせ業務

予防接種、人獣共通感染症、SARS、インフルエンザ、鳥インフルエンザ、風疹、麻疹、ポリオ、下痢症ウイルス等、その他感染症に関する電話、メールによる問い合わせに対応した。年間の問い合わせ件数は一人当たり電話約500件、メール約50件にのぼった。[岡部信彦、谷口清洲、重松美加、森兼啓太、田中政宏、木村幹男、多田有希、安井良則、多屋馨子、新井智、佐藤弘、稲田敏樹、伊藤健一郎、西尾治]

5 - I - 2 . 来所者への感染症情報センターの活動および感染症対策に関する情報提供と広報

国内生徒、学生の修学旅行や社会見学、などの来所時に、感染症情報センターの活動、国内感染症の発生動向、国内および国際連携による感染症対策の現状、SARSを含む国際感染症対策、パンデミック対策などについての情報提供、広報業務をおこなった。[岡部信彦、谷口清洲、重松美加、森兼啓太、田中政宏、砂川富正、中島一敏、木村幹男、多田有希、多屋馨子]

5 - I - 3 . メディアへの対応

通常の場合は、情報センター内において担当者を決め、取材等の対応に応じている。しかし、SARS、鳥インフルエンザ、原因不明急性脳症など、社会的影響の大きい疾患や、集団発生に対しては、多数のメディアからの取材申し込みへの対策として、昨年度のSARS対応時の体制を継続し、情報センター・メディア感染症情報交換会(仮称)を1週間あるいは2週間に1回のメディアに対する情報提供、解説、意見交換を行った。感染症情報センターが、センター長を責任者として、あくまでも感染症としての付加価値的説明を行う形式をとり、感染研の

感染症情報センター

公式見解、公式発表、記者会見では無いことを出席希望社（者）に了解して貰った上で、Risk communicationの一環として、取材届けを提出してもらい実施した。[岡部信彦、感染症情報センタースタッフ一同]

5 - II . 血清銀行に関する業務

5 - II - 1 . 血清の保管

感染症流行予測調査事業のため各都道府県において収集された血清の一部を国内血清銀行に受け入れ、保管した。平成 16 年度に受け入れた血清は、計 3,427 本であった。また、平成 16 年職員血清として計 560 本の血清を受け入れ保管した。

5 - II - 2 . 研究目的での血清の払い出し

使用申請があった 1 研究に対して計 2,434 本の払い出しを行った。

5 - II - 3 . その他

血清銀行事務局として血清銀行を倫理委員会に申請するための準備を行った。血清銀行運営委員会規程の草案を作成した。

5 - II - 4 . 保管血清の管理

[荒木和子、丹生隆、多屋馨子、佐藤弘、新井智、早川丘芳、田中幸江、岡部信彦]

5 - III . 急性脳症患者検体の保管に関する業務

平成 16 年 9-11 月に東北地方を中心に複数例の急性脳症の発生があり、その原因としてスギヒラタケの摂取が疑われたが確定はされなかった。感染症の疑いも残されており、検体の散逸を防ぐため厚生労働省の指示により、各県から感染研感染症情報センターに検体が送付収集された。合計、7 県 36 名の患者から採取された 189 検体 {血清 (104)、髄液 (27)、便 (31)、咽頭拭い液 (21)、尿 (5)、脳 (1)} の保管を行った。[佐藤弘、荒木和子、丹生隆、新井智、多屋馨子、岡部信彦]

5 - IV . 予防接種に関する業務

5 - IV - 1 . 予防接種情報公開に関する業務

1) 感染症情報センターHP 内に日本の予防接種スケジ

ュール 2004 を公開した。

2) 感染症情報センターHP 予防接種のページを更新した。[多屋馨子、松岡静香、新井智、岡部信彦]

5 - IV - 2 . 日本ワクチン学会に関する業務

ニュースレター事務局業務を行った。著者への連絡、原稿収集、ワクチン関連トピックスを担当し、その原稿を作成した。[岡部信彦、多屋馨子]

5 - IV - 3 . 予防接種後副反応・健康状況調査検討会

上記委員として、調査解析に参加した。[岡部信彦、多屋馨子]

5 - IV - 4 . 予防接種法政省令改正に関する技術的支援業務

厚生労働省結核感染症課において、健康局長の諮問機関である予防接種に関する検討会の運営を行い、また予防接種法政省令改正に関する技術的支援業務をおこなった。[田中政宏（厚生労働省結核感染症課併任）]

5 - V . 感染事故応急対応医師小委員会業務

バイオセーフティ管理の一環として、病原体等曝露事故対応応急マニュアルの作成に参加した。

予防接種に関するマニュアルの作成に参加した。[多屋馨子、谷口清州、木村幹男、岡部信彦、佐多徹太郎（感染症病理部）]

5 - VI . 公的機関の委員

(1) 厚生労働省薬事・食品衛生審議会臨時委員（乳肉水産食品部会）の委嘱を国より受けた。[西尾治]

(2) 内閣府食品安全委員会専門委員の任命を国より受けた。[西尾治]

6 . 検査実施状況

	行政	研究	合計
ウイルス分離同定	0	137	137
核酸・抗原検出	0	812	812
血清反応	0	1493	1493
合計	0	2442	2442

感染症情報センター

氏名	身分	期間	出身
神谷元	協力研究員	H17.3.1-	聖路加国際病院
John M. Kobayashi	客員研究員	H17.3.1-	ワシントン州保健局
川上桂子	協力研究員	H17.2.1-	国立保健医療科学院
日谷昭裕	協力研究員	H17.1.1-	医療法人社団善仁会
松崎充宏	協力研究員	H16.12.1-	日本海事検定協会
浦島充佳	協力研究員	H16.12.1-	東京慈恵会医科大学
中瀬克己	協力研究員	H16.9.1-	岡山市保健所
加來浩器	協力研究員	H16.9.1-	陸上自衛隊衛生学校
松井珠乃	協力研究員	H16.9.1-	天草中央総合病院
田中毅	協力研究員	H16.9.1-	福岡検疫所
加藤茂孝	客員研究員	H16.8.1-	CDC 客員研究員
森下高行	協力研究員	H16.7.1-	愛知県食品衛生検査所
斉藤章暢	協力研究員	H16.7.1-	埼玉県衛生研究所
荒川香南子	協力研究員	H16.5.1-	無職
田村務	協力研究員	H16.5.1-	新潟県保健環境科学研究所
松永泰子	協力研究員	H16.5.1-	元職員
中村明子	客員研究員	H16.4.1-	東京大学客員研究員
金澤保	客員研究員	H16.4.1-	産業医科大学
長谷川斐子	客員研究員	H16.4.1-	元職員
三村敬司 (FETP)	協力研究員	H16.4.1-	陸上自衛隊
神垣太郎 (FETP)	協力研究員	H16.4.1-	岩手県立磐井病院
山口亮 (FETP)	協力研究員	H16.4.1-	北海道保健福祉部
森山和郎 (FETP)	協力研究員	H16.4.1-	大阪府茨木保健所
鈴木葉子 (FETP)	協力研究員	H16.4.1-	東京女子医科大学
登坂直規 (FETP)	協力研究員	H16.4.1-	会津中央病院
太田正樹 (FETP)	協力研究員	H16.4.1-	札幌市保健福祉局
松館宏樹 (FETP)	協力研究員	H16.4.1-	岩手県食肉衛生検査所
小林幹子 (FETP)	協力研究員	H16.4.1-	富山県新川厚生センター
奥村順子	協力研究員	H16.4.1-	東京大学大学院
藤井達也	協力研究員	H16.4.1-	三宿病院
逸見佳美	協力研究員	H16.4.1-	陸上自衛隊
島田靖	協力研究員	H16.4.1-	日本医科大学
吉田英樹	協力研究員	H16.4.1-	大阪市保健所
森伸生	協力研究員	H16.4.1-	北里生命科学研究所
上野久美 (FETP)	協力研究員	H16.4.1-	東北大学大学院
上野正浩 (FETP)	協力研究員	H16.4.1-	東京都立墨東病院
増田和貴 (FETP)	協力研究員	H16.4.1-	東京都健康局

加藤由美子	協力研究員	H16.4.1-	バイオマトリックス研究所
ARUN KUMAR ADHIKARY	協力研究員	H16.4.1-	東京大学 医学部
URMILA BANIK	協力研究員	H16.4.1-	チタゴング 医学部
小松崎眞	協力研究員	H16.4.1-	東京慈恵医科大学
佐藤弘	協力研究員	H16.4.1-	酪農学園大学 大学院
寺村知子	協力研究員	H16.4.1-	京都市衛生公害研究所
樋口薫	協力研究員	H16.4.1-	自宅開業医
藤井逸人	協力研究員	H16.4.1-	京都市役所 保健福祉局
安井良則	協力研究員	H16.4.1-	大阪 堺市保健所
齋藤利江	協力研究員	H16.3.1-	日本冷凍食品検査協会

発表業績一覧

. 誌上发表

1 . 欧文発表

原著・総説

- 1) 2001. Editorial Committee of Findings of Infectious Agents in Japan: Annual Report on Findings of Infectious Agents in Japan, 2000. Jpn. J. Infect. Dis. 54(Suppl).
- 2) Asada, Y. and Y. Ohkusa. 2004. Analysis of Health-related Quality of Life (HRQL), its distribution, and its distribution by income in Japan, 1989 and 1998. Soc. Sci. Med. 59:1423-1433.
- 3) Banik, U., A. K. Adhikary, E. Suzuki, T. Inada, and N. Okabe. 2005. Multiplex PCR assay for rapid identification of oculopathogenic adenoviruses by amplification of the fiber and hexon genes. J. Clin. Microbiol. 43:1064-1068.
- 4) Bayard, V., P. T. Kitsutani, E. O. Barria, L. A. Ruedas, D. S. Tinnin, C. Munoz, I. B. de Mosca, et al. 2004. Outbreak of hantavirus pulmonary syndrome, Los Santos, Panama, 1999-2000. Emerg. Infect. Dis. 10:1636-1642.
- 5) Fujimoto, T., T. Okafuji, M. Ito, S. Nukuzuma, M. Chikahira, and O. Nishio. 2004. Evaluation of a bedside immunochromatographic test for detection of adenovirus in respiratory samples, by comparison to virus isolation, PCR, and Real-Time PCR. J. Clin. Microbiol. 42:5489-5492.
- 6) Hansman, G. S., L. T. P. Doan, T. A. Kgyuen, S. Okitsu, N. Nishio, et al. 2004. Detection of norovirus and sapovirus infection among children with gastroenteritis in Ho Chi Minh city, Vietnam. Arch. Virol. 149:1673-1688.
- 7) Hirakata, Y., K. Arisawa, O. Nishio, and O. Nakagomi. 2005. Multiprefectural spread of gastroenteritis outbreaks attributable

- to a single genogroup norovirus strain from a tourist restaurant in Nagasaki, Japan. J. Clin. Microbiol. 43:1093-1098.
- 8) Inokuma, H., M. Tsuji, S.-J. Kim, T. Fujimoto, M. Nagata, E. Hosoi, S. Arai, et al. 2004. Phylogenetic analysis of Theileria sp. from sika deer, Cervus nippon, in Japan. Vet. Parasitol. 120:339-345.
- 9) Kano, S. and M. Kimura. 2004. Trends in malaria cases in Japan. Acta Trop. 89:271-278.
- 10) Kimura, M. 2004. Vaccination and malaria prophylaxis for international travelers. Health Eval. Promot. 31:592-593.
- 11) Kimura, M., M. Sakamoto, T. Adachi, and H. Sagara. 2005. Diagnosis of febrile illnesses in returned travelers using the PC software GIDEON. Travel Med. Infect. Dis. 3:157-160.
- 12) Li, L., H. Shimizu, L. T. P. Doan, P. G. Tung, S. Okitsu, O. Nishio, E. Suzuki, et al. 2004. Characterizations of adenovirus type 41 isolates from children with acute gastroenteritis in Japan, Vietnam and Korea. J. Clin. Microbiol. 42:4032-4039.
- 13) Matsui, T., S. Suzuki, H. Takahashi, T. Ohyama, J. Kobayashi, H. Izumiya, H. Watanabe, et al. 2004. Salmonella Enteritidis outbreak associated with a school-lunch dessert: cross-contamination and a long incubation period, Japan, 2001. Epidemiol. Infect. 132:873-879.
- 14) Matui, T., T. Ono, and Y. Inoue. 2004. An Outbreak of Vibrio vulnificus Infection in Kumamoto, Japan, 2001. Arch. Dermatol. 140:888-889.
- 15) Ohkusa, Y. 2005. Policy evaluation for the subsidy for influenza vaccination in elderly. Vaccine 23:2256-2260.
- 16) Ohkusa, Y. and K. Taniguchi. 2005. Prediction of Outbreak in Smallpox and Evaluation of Control Measure Policy in Japan,

- by using Mathematical Model. *J. Infect. Chemother.* 11:71-80.
- 17) Phan, T. G., M. Okame, T. A. Nguyen, O. Nishio, S. Okitsu, and H. Ushijima. 2005. Genetic diversity of sapovirus in fecal specimens from infants and children with acute gastroenteritis in Pakistan. *Arch. Virol.* 150:371-377.
- 18) Seto, Y., N. Iritani, H. Kudo, A. Kaida, T. Murakami, K. Haruki, O. Nishio, et al. 2005. Genotyping of norovirus strains detected in outbreaks between April 2002 and March 2003 in Osaka City, Japan. *Microbiol. Immunol.* 49:275-283.
- 19) Shinkawa, H., H. Yasuhara, S. Naka, K. Morikane, Y. Furuya, H. Niwa, and T. Kikuchi. 2004. Characteristic features of abdominal organ injuries associated with gastric rupture in blunt abdominal trauma. *Am. J. Surg.* 187:394-397.
- 20) Takahashi, H., M. H. Kramer, Y. Yasui, H. Fujii, K. Nakase, K. Ikeda, T. Imai, et al. 2004. Nosocomial *Serratia marcescens* Outbreak in Osaka, Japan, From 1999 to 2000. *Infect. Control. Hosp. Epidemiol.* 25:156-161.
- 21) Tanaka-Taya, K., J. Sashihara, H. Kurahashi, K. Amo, H. Miyagawa, K. Kondo, S. Okada, et al. 2004. Human herpesvirus 6 (HHV-6) is transmitted from parent to child in an integrated form and characterization of cases with chromosomally integrated HHV-6 DNA. *J. Med. Virol.* 73:465-473.
- 22) Harada, S., Y. Kamata, Y. Ishii, H. Eda, N. Okabe, et al. 2004. Maintenance of serum immunoglobulin G antibodies to EBV nuclear antigen2 in healthy individuals from different age groups in a Japanese population with a high childhood incidence of asymptomatic primary EBV infection. *Clin. Diagn. Lab. Immunol.* 11:123-130
- 23) Tanaka, T., H. Takahashi, J. M. Kobayashi, T. Ohyama and N. Okabe. 2004. A Nosocomial Outbreak of Febrile Bloodstream Infection Caused by Heparinized-Saline Contaminated with *Serratia marcescens*, Tokyo, 2002. *Jpn. J. Infect. Dis.* 57:189-192.
- 24) Adhikary, A. K., T. Inada, J. Numaga, E. Suzuki, H. Ushijima, U. Banik, A. Mukouyama, S. Matsuno and N. Okabe. 2004. Characterization of hexon and fibre genes of a novel strain of adenovirus involved in epidemic keratoconjunctivitis. *J. Clin. Path.* 57:95-97.
- 書籍・単行本
- 1) Hirose, K., K. Itoh, and H. Watanabe. *Salmonella spp. Encyclopedia of Diagnostic Genomics and Proteomics.* 2005, New York: Marcel Dekker.
2. 和文発表
- 原著・総説
- 1) 国立感染症研究所, 厚生労働省結核感染症課. 病原微生物検出情報: 月報, 2004-2005. 25巻4号-26巻3号.
- 2) 予防医学事業中央会. ヒト由来病原体の検出数(統計のペ - ジ). 予防医学ジャーナル, 2004-2005. Nos. 394-405.
- 3) 新井智, 多屋馨子, 岡部信彦, 高崎智彦, 倉根一郎. わが国における日本脳炎の疫学と今後の対策について. 臨床とウイルス, 2004. 32: 13-22.
- 4) 新井智, 辻正義, 石原智明. パベシア 新興再興感染症 SARS の教訓. からだの科学, 2004. 増刊: 122-125.
- 5) 新井智, 高崎智彦, 多屋馨子, 早川丘芳, 倉根一郎. 近年の日本脳炎患者発生状況および感染リスク. 獣医畜産新報, 2004. 57: 653-656.
- 6) 新井智. 動物園などの展示動物の注意点. *Pharma Medica*, 2004. 22: 29-32.
- 7) 藤本嗣人, 近平雅嗣, 西尾治, 岡藤輝夫, 岡藤隆夫. 平成15年に兵庫県で発生した過去10年間で最大規模の咽頭結膜熱の流行時におけるウイルス検索結果および臨床現場におけるアデノウイルス迅速診断結果の有効性に関する検討. 兵庫の公衆衛生, 2004. 19: 24-25.
- 8) 春木宏介, 櫻井裕, 木村幹男. 新興再興感染症 .SARS の教訓. 第3部 再興感染症と注目される感染症. マラリア. からだの科学, 2004. 増刊: 229-233.
- 9) 橋戸円, 岡部信彦. 性感染症の現状. 化学療法の領域, 2005. 21(8): 1083-1089.
- 10) 橋戸円. 性感染症(STD)の最近の動向. 産科と婦人科, 2005. 72(7): 825-831.
- 11) 日谷明裕, 木村幹男. マラリア予防におけるスタンバイ治療の位置づけ. 日本醫事新報, 2004. 4225: 26-31.
- 12) 日谷明裕, 木村幹男. 病院内での疥癬の集団発生におけるイベルメクチンの使用経験. 日本臨床寄生虫学会誌, 2004. 15: 68-71.
- 13) 日谷明裕, 木村幹男. 特集 プライマリケアのため

感染症情報センター

- の寄生虫症および動物媒介疾患．トピックス．マラリア治療の落とし穴．治療，2004．86：2814-2817．
- 14) 稲田敏樹，多屋馨子，新井智，佐藤弘，荒木和子．「感染症の診断・治療ガイドライン 2004」DNA 診断とその臨床応用．日本医師会雑誌，2004．132(臨時増刊 No. 12)：327-331．
- 15) 稲田敏樹，多屋馨子，新井智，佐藤弘，荒木和子．「感染症の診断・治療ガイドライン 2004」抗原、抗体法．日本医師会雑誌，2004．132(臨時増刊 No. 12)：320-323．
- 16) 稲田敏樹，多屋馨子，新井智，佐藤弘，荒木和子．「感染症の診断・治療ガイドライン 2004」検体の採取方法、送付方法．日本医師会雑誌，2004．132(臨時増刊 No. 12)：332-334．
- 17) 稲田敏樹，多屋馨子，新井智，佐藤弘，荒木和子．「感染症の診断・治療ガイドライン 2004」培養、同定．日本医師会雑誌，2004．132(臨時増刊 No. 12)：324-326．
- 18) 狩野繁之，木村幹男．特集 新興感染症の今．マラリアの輸入は続く．保健の科学，2004．46：574-578．
- 19) 川上桂子，木村幹男，橋本迪子，青木和子，浜田勝．日本人渡航者のマラリア予防対策についての状況．厚生 の指標，2005．52(4)：23-27．
- 20) 木村幹男．特集 話題の感染症．6．海外旅行と輸入感染症．INFECTION CONTROL，2005．14：531-535．
- 21) 木村幹男．特集「寄生虫病とペット病 新たな認識と実地診療」．輸入感染症．日本医師会雑誌，2004．131：1763．
- 22) 木村幹男．「感染症の診断・治療ガイドライン 2004」四類感染症．マラリア．日本医師会雑誌，2004．132(臨時増刊 No. 12)：164-169．
- 23) 木村幹男，中村哲也，名和行文．特集 国際化時代の感染症対策 海外渡航者の感染症．[診断・治療の実際] 研究班の薬剤保管体制と熱帯病・寄生虫症薬物治療の動向．クリニカルプラクティス，2004．23：1050-1053．
- 24) 木村幹男，名和行文．特集 プライマリケアのための寄生虫症および動物媒介疾患．治療．治療の現状．治療，2004．86：2767-2771．
- 25) 木村幹男，狩野繁之．[蚊が媒介する感染症] 5．輸入マラリアの現状と治療・予防．感染症，2004．34：81-91．
- 26) 木村幹男，狩野繁之．特集 日常病にどう対処しますか？ 頻度順に考える症状/疾病の対処法．その他で比較的多い健康問題の対応(感染症・呼吸器系)．輸入感染症．治療，2004．86 増刊：1130-1132．
- 27) 小西敏郎，針原康，森兼啓太．手術部位感染サーベイランス．日本外科学会雑誌，2004．105：720-725．
- 28) 森伸生，他．本邦に置ける A 型肝炎・E 型肝炎の感染症発生動向調査のまとめ．小児科，2004．45：1465-1470．
- 29) 森伸生，多屋馨子，砂川富正，谷口清州，石田久美子，岡部信彦．中学校での麻疹集団発生における疫学調査と対策．日本小児科学会雑誌，2004．108：615-619．
- 30) 森兼啓太．大腸外科における手術部位感染．日本医事新報，2005．4214：85．
- 31) 森兼啓太．院内感染予防．治療，2005．87：351-355．
- 32) 森兼啓太．鳥インフルエンザについて、私たちが知っておきたいこと．INFECTION CONTROL，2004．13：456-458．
- 33) 森兼啓太．感染対策問題集・手術部位感染．INFECTION CONTROL，2004．13：978-980．
- 34) 森兼啓太．手術部位感染サーベイランスのポイント．感染と抗菌薬，2004．7：321-323．
- 35) 森兼啓太．手術部位感染対策・術中/術後の対策．INFECTION CONTROL，2004．13：1263-1267．
- 36) 森兼啓太．CDC アップデート．Carlisle，2004．9：11．
- 37) 中島一敏．A 型肝炎ワクチンと B 型肝炎ワクチン．臨床と微生物，2004．31：321-325．
- 38) 西尾治．ノロウイルスによる感染症と食中毒．日本医事新報，2005．4221(105)．
- 39) 西尾治．ノロウイルス感染と遺伝子迅速検査の現状と維持．The Medical & Test Journal，2005．919：5．
- 40) 西尾治，杉枝正明．ノロウイルスによる食中毒について．乳酸菌ニュース，2005．447：3-6．
- 41) 西尾治．ウイルスの季節がやってきた！ ノロウイルス、A 型および E 型肝炎ウイルス．食と健康，2004．575：54-61．
- 42) 西尾治，吉澄志磨，野田衛．ウイルス性食中毒について 特にノロウイルスおよび A 型肝炎ウイルス．日本食品微生物学会雑誌，2004．21：179-186．
- 43) 西尾治，秋山美穂，愛木智香子．ノロウイルスによ

- る食中毒. 月刊 HACCP, 2004. 109: 48-50.
- 44) 岡部信彦, 新井智. 日本脳炎ワクチン. 臨床と微生物, 2004. 31: 343-347.
- 45) 大日康史, 重松美加, 谷口清州. 2003/04 シーズンのインフルエンザ流行のインパクト. 病原微生物検出情報 (IASR), 2004. 25: 285-286.
- 46) 大日康史, 菊池宏幸. 確率数理モデルを用いた S A R S 対策の評価: 大阪の事例の検討. 厚生指標, 2004. 51: 34-41.
- 47) 大日康史. 全殺処分か、予防的ワクチネーションか? 鳥インフルエンザ防疫策に関する数理モデルからの評価. 鶏卵肉情報, 2004: 68-74.
- 48) 大日康史. 予防接種の政策評価. 保健の科学, 2004. 46: 597-603.
- 49) 大日康史, 菅原民枝. 水痘ワクチンの医療経済学的評価. 病原微生物検出情報 (IASR), 2004. 25: 14-15.
- 50) 大日康史. インフルエンザの流行状況把握システム. 季刊インフルエンザ, 2004. 6: 51-60.
- 51) 大日康史. パンデミックプランニングの最先端: 数学的モデルの政策への応用. 季刊インフルエンザ, 2004. 6: 61-69.
- 52) 重松美加. 保育園・幼稚園における腸管出血性大腸菌感染症. メディカルトリビューン, 2004. 30: suppl.
- 53) 重松美加, 谷口清州. SARS の脅威 (1) 流行と疫学. 臨床病理レビュー特集, 2004. 129: 78-85.
- 54) 重松美加, 谷口清州. アデノウイルス感染症 - 咽頭結膜熱 (プール熱). からだの不思議, 2004. 1: 26-28.
- 55) 重松美加, 岡部信彦. SARS 流行 2002~2003、そして 2004. 臨床と研究, 2004. 81: 1-7.
- 56) 新川奈緒美, 川元孝久, 秋山美穂, 加藤由美子, 西尾治. 吐物が感染源と推察されたノロウイルス集団胃腸炎事例について. 臨床とウイルス, 2004. 32: 195-201.
- 57) 菅原民枝, 大日康史, 他. スイッチ O T C の医療費への効果. 総合臨床, 2004. 53: 3070-3077.
- 58) 杉枝正明, 新川奈緒美, 大瀬戸光明, 徳竹由美, 山口卓. Norovirus 感染により排泄されるウイルス量について. 臨床とウイルス, 2004. 32: 189-194.
- 59) 砂川富正. 新しいウイルス感染症・鳥インフルエンザ. 東京小児科医会報, 2004. 23(2): 124-127.
- 60) 多田有希. 「感染症の診断・治療ガイドライン 2004」
- 四類感染症・成人麻疹. 日本医師会雑誌, 2004. 132(臨時増刊 No. 12): 261.
- 61) 多田有希, 岡部信彦. サーベイランスからみたウイルス感染症の流行. 小児内科, 2004. 37(1): 11-21.
- 62) 多田有希, 藤生道子. 川崎市における BCG 接種技術評価の経験. 外来小児科, 2004. 8(1): 58-62.
- 63) 田中政宏, 岡部信彦. 海外における予防接種の動向. 小児診療, 2004. 67: 1819-1827.
- 64) 谷口清州. インフルエンザの最新動向. 調剤と情報, 2004. 10: 1482-1486.
- 65) 谷口清州. ウイルス性出血熱. 日本内科学会雑誌, 2004. 93: 2303-2308.
- 66) 谷口清州. 世界規模の感染症監視体制. 臨床と研究, 2004. 81: 1573-1577.
- 67) 谷口清州. GOARN を中心に. カレントセラピー, 2004. 22: 113.
- 68) 谷口清州. 今日の疫学状況-国内サーベイランスを中心に. 総合臨床, 2004. 54: 239-245.
- 69) 谷口清州. 「感染症の診断・治療ガイドライン 2004」高病原性鳥インフルエンザ. 日本医師会雑誌, 2004. 132(臨時増刊 No. 12): 122-125.
- 70) 谷口清州. 「感染症の診断・治療ガイドライン 2004」咽頭結膜熱. 日本医師会雑誌, 2004. 132(臨時増刊 No. 12): 228-229.
- 71) 谷口清州. 「感染症の診断・治療ガイドライン 2004」インフルエンザ. 日本医師会雑誌, 2004. 132(臨時増刊 No. 12): 266-269.
- 72) 谷口清州. 感染症流行情報と臨床での対応. 小児科, 2004. 45: 483-490.
- 73) 谷口清州. 「感染症の診断・治療ガイドライン 2004」無菌性髄膜炎. 日本医師会雑誌, 2004. 132(臨時増刊 No. 12): 300-303.
- 74) 多屋馨子. 予防接種の現状と問題点: 定期接種 副反応. 小児看護, 2004. 27: 1609-1615.
- 75) 多屋馨子. わが国の風疹の現状と対策. LABEAM, 2004. 16: 1-4.
- 76) 多屋馨子. かぜ、インフルエンザの最新知識の総力特集~昔からの知恵袋から最新の医学知識まで. 健, 2004. 33: 27-31.
- 77) 多屋馨子. かぜ、インフルエンザの基礎知識. 健,

2004. 33: 22-24.
- 78) 多屋馨子. インフルエンザワクチン接種の必要性和動向. 内科, 2004. 93: 142-148.
- 79) 多屋馨子. 医療関係者に対する予防接種. 総合臨床, 2004. 53: 1886-1890.
- 80) 多屋馨子. わが国の麻疹・風疹の現状と対策 この秋にぜひ風疹ワクチンを. 臨床と微生物, 2004. 31: 446-447.
- 81) 多屋馨子. 急性ウイルス感染症 かぜ・インフルエンザ・SARS の診断と治療. インフルエンザ-予防. 診断と治療, 2004. 92: 2249-2254.
- 82) 多屋馨子. 新興感染症 HHV-6/HHV-7. 新興再興感染症 SARS の教訓. からだの科学, 2004. 増刊: 67-71.
- 83) 多屋馨子. 「感染症の診断・治療ガイドライン 2004」 伝染性紅斑. 日本医師会雑誌, 2004. 132(臨時増刊 No. 12): 244-245.
- 84) 岡部信彦. 炭疽菌-国立感染症研究所からの最新情報- 新潟医学会雑誌, 2004. 118: 105-110.
- 85) 岡部信彦. 21 世紀における感染症対策と展望. 臨床病理, 2004. 特集 129 号:1-8.
- 86) 岡部信彦, 新井智. 日本脳炎ワクチン. 臨床と微生物, 2004. 31: 343-347.
- 87) 岡部信彦. 国際感染症対策-インフルエンザ-. 臨床と微生物学, 2004. 31: 407-411.
- 88) 岡部信彦. 予防接種法 (予防接種制度). 小児看護, 2004. 27: 1569-1573.
- 89) 岡部信彦. 新興感染症の脅威、そしてその対策. 日本病院薬剤師会雑誌, 2004. 40: 1373-1377.
- 90) 岡部信彦. SARS の脅威は消えたのか. 公衆衛生, 2004. 68: 861-864.
- 91) 岡部信彦. ウイルス感染症時代 -SARS アウトブレイクが教えたこと-. 現代医療, 2004. 36: 2176-2183.
- 92) 岡部信彦. 人と動物の共通感染症 -なぜ今話題になってきたか、その対策は-. Pharma Medica, 2004. 22: 11-15.
- 93) 米山徹夫, 清原和子, 下池貴志, 森伸生, 岡部信彦. A 型肝炎-我が国の最近の発生動向を中心に-. 臨床とウイルス, 2004. 32: 149-155.
- 94) 中島一敏, 岡部信彦. SARS 集団発生の発端と経緯. 化学療法の領域, 2004. 20: 19-23.
- 95) 砂川富正, 岡部信彦. SARS -最近の動向を踏まえて-. 最新医学, 2004. 59: 1833-1838.
- 96) 岡部信彦. 「感染症の診断・治療ガイドライン 2004」 痘そう (天然痘). 日本医師会雑誌, 2004. 132(臨時増刊 No. 12): 70-73.
- 97) 岡部信彦. 「感染症の診断・治療ガイドライン 2004」. 手足口病. 日本医師会雑誌, 2004. 132(臨時増刊 No. 12): 240-243.
- 書籍・単行本
- 1) 新井智, 岡部信彦. Zoonoses の現況と対策・治療, 日本薬剤師会雑誌 2004. p. 65-70.
- 2) 新井智, 辻正義, 石原智明. バベシア症, 人と動物の共通感染症ハンドブック 2004. p. 190-191.
- 3) 萩原敏且, 木村幹男. 性器クラミジア感染症, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 199-200.
- 4) 萩原敏且, 木村幹男. 発疹チフス, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 241-243.
- 5) 橋戸円. 性器ヘルペスウイルス感染症, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 135-137.
- 6) 木村幹男, 三浦聡之. 39. マラリア, 感染症, 竹田美文, 木村哲編集. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 167-172.
- 7) 木村幹男. リケッチア症. A チフス群リケッチア感染症. A-1 発疹チフス, 感染症予防必携 (第 2 版), 山崎修道他, 編集. 2005, (財) 日本公衆衛生協会. p. 417-419.
- 8) 木村幹男. 6 臓器別感染症診療の手順. 6.9 輸入感染症, 研修医のための感染症クリニカルガイダンス 2005, ヴァンメディカル. p. 247.
- 9) 木村幹男, 石井明. 第 3 章 抗生物質・抗菌薬療法の実際. A. 感染症からみた抗生物質・抗菌薬の選択と使用の実際. マラリア, 実践 抗生物質・抗菌薬療法ガイド 2005, 文光堂. p. 408-412.
- 10) 森兼啓太, 今井栄子 (翻訳). サーベイランスのための CDC ガイドライン - NNIS マニュアル 2004 年版より, 小林寛伊, 広瀬千也子監修. 2004, メディカ出版: 大阪.
- 11) 森兼啓太. III-30 サーベイランス, 在宅ケアと

- 感染制御, 小林寛伊(編集). 2005, メジカルフレンズ社: 東京. p. 221-228.
- 12) 森兼啓太. III-6 風疹, 病院感染 こんなときどうする!?, 小林寛伊(監修). 2005, 南山堂: 東京. p. 70-72.
- 13) 西尾治. 小型球形ウイルス(ノロウイルス, サボウウイルス, アストロウイルス), 食品衛生検査指針微生物編, 厚生労働省監修. 2004, 社団法人日本食品衛生協会: 東京. p. 450-474.
- 14) 西尾治. アデノウイルス, 食品衛生検査指針微生物編, 厚生労働省監修. 2004, 社団法人日本食品衛生協会: 東京. p. 500-512.
- 15) 岡部信彦, 多屋馨子: 監修, 予防接種に関する Q&A 集 2004, 社団法人細菌製剤協会: 東京. p. 1-86.
- 16) 大日康史. ワクチンの費用対効果分析, ワクチンの事典 2004, 朝倉書店: 東京. p. 281-290.
- 17) 重松美加, 岡部信彦. 重症急性呼吸器症候群(SARS), 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 117-120.
- 18) 多田有希, 木村幹男, 岡部信彦. 第6章. 主要疾患の現状と予防対策 8. 感染症 “管理栄養士講座 公衆衛生学”(伊藤ちぐさ, 村松康弘編著). 2004, 健帛社. p. 130-141.
- 19) 多田有希, 岡部信彦. A群溶血性レンサ球菌咽頭炎, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 24-25.
- 20) 多田有希, 岡部信彦. 百日咳, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 214-216.
- 21) 多田有希, 岡部信彦. 伝染性紅斑, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 168-169.
- 22) 多田有希, 岡部信彦. 細菌性髄膜炎, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 99-100.
- 23) 谷口清州. ネオエスカ 感染症患者情報と感染症対策, 感染症生体防御とアレルギー2004, 同文書院. p. 200-203.
- 24) 谷口清州. 発展途上国における予防接種計画, ワクチンの事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 272-280.
- 25) 谷口清州. RSウイルス感染症, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 9-12.
- 26) 谷口清州. 急性脳炎, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 62-63.
- 27) 谷口清州. 感染性胃腸炎, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 44-45.
- 28) 谷口清州. 咽頭結膜熱, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 13-14.
- 29) 谷口清州. ヘルパンギーナ, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 229-230.
- 30) 谷口清州. マイコプラズマ肺炎, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 235-236.
- 31) 谷口清州. 無菌性髄膜炎, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 246-248.
- 32) 谷口清州. 高病原性トリ型インフルエンザ, 感染症, 竹田美文編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 111-115.
- 33) 多屋馨子. 能動免疫と受動免疫(翻訳), R-Book 2003 日本版-小児感染症の手引き-, 岡部信彦監修. 米国小児科学会編集. 2004, 日本小児医事出版社: 東京. p. 1-53.
- 34) 多屋馨子. 水痘, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 128-130.
- 35) 多屋馨子, 新井智. 風疹ワクチン, ワクチンの事典, 日本ワクチン学会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 54-67.
- 36) 多屋馨子. 突発性発疹, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 177-178.
- 37) 多屋馨子. 急性灰白髄炎(ポリオ, 小児麻痺), 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 64-66.
- 38) 多屋馨子. 麻疹, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 237-240.
- 39) 多屋馨子. 伝染性単核症, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 170-173.
- 40) 多屋馨子, 岡部信彦. 手足口病, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p.

感染症情報センター

- 164-165.
- 41) 多屋馨子. サイトメガロウイルス感染症, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 103-106.
- 42) 多屋馨子. 流行性耳下腺炎(ムンプス、おたふくかぜ), 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 261-262.
- 43) 多屋馨子. 風疹, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 217-218.
- 44) 多屋馨子. ヘルペス脳炎, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p. 231-234.
- 45) 多屋馨子. ライ症候群, 最新版家庭医学大全科, 高久史磨他監修. 2004, 株式会社法研: 東京. p. 2638-2640.
- 46) 多屋馨子. 流行性耳下腺炎(ムンプス), 最新版家庭医学大全科, 高久史磨他監修. 2004, 株式会社法研: 東京. p. 2641-2642.
- 47) 多屋馨子. ヘルパンギーナ, 最新版家庭医学大全科, 高久史磨他監修. 2004, 株式会社法研: 東京. p. 2642-2643.
- 48) 多屋馨子. かぜ症候群, 最新版家庭医学大全科, 高久史磨他監修. 2004, 株式会社法研: 東京. p. 2652-2653.
- 49) 多屋馨子. ムンプス髄膜炎, 最新版家庭医学大全科, 高久史磨他監修. 2004, 株式会社法研: 東京. p. 2633-2635.
- 50) 多屋馨子. 風疹(三日ばしか), 最新版家庭医学大全科, 高久史磨他監修. 2004, 株式会社法研: 東京. p. 2699-2700.
- 51) 多屋馨子. 麻疹(はしか), 最新版家庭医学大全科, 高久史磨他監修. 2004, 株式会社法研: 東京. p. 2700-2702.
- 52) 多屋馨子. 手足口病, 最新版家庭医学大全科, 高久史磨他監修. 2004, 株式会社法研: 東京. p. 2705-2706.
- 53) 多屋馨子. 水痘(みずぼうそう), 最新版家庭医学大全科, 高久史磨他監修. 2004, 株式会社法研: 東京. p. 2706-2707.
- 54) 多屋馨子. 流行性髄膜炎(急性脳脊髄膜炎) その他の化膿性髄膜炎, 最新版家庭医学大全科, 高久史磨他監修. 2004, 株式会社法研: 東京. p. 2633-2635.
- 55) 多屋馨子. 伝染性紅斑(リンゴ病), 最新版家庭医学大全科, 高久史磨他監修. 2004, 株式会社法研: 東京. p. 2702-2703.
- 56) 多屋馨子. 突発性発疹(小児バラ疹), 最新版家庭医学大全科, 高久史磨他監修. 2004, 株式会社法研: 東京. p. 2702.
- 57) 多屋馨子. ウイルス性髄膜炎(無菌性髄膜炎), 最新版家庭医学大全科, 高久史磨他監修. 2004, 株式会社法研: 東京. p. 2636-2637.
- 58) 多屋馨子. インフルエンザQ&A.2004年版2004, 診療新社. p. 2-3.
- 59) 多屋馨子. インフルエンザQ&A.2004年版2004, 診療新社. p. 8.
- 60) 岡部信彦. 輸入感染症, 標準感染症学 第2版, 斎藤厚, 那須勝, 江崎孝行編集. 2004, 医学書院. p.149-164.
- 61) 岡部信彦・編 新興再興感染症, からだの科学, 日本評論社. 2004.
- 62) 岡部信彦. 黄熱ワクチン, 感染症の事典, 国立感染症研究所学友会編. 2004, 朝倉書店: 東京. p.240-246.
- 63) 岡部信彦. 天然痘(痘瘡), 感染症, 竹田美文, 木村哲編集. 2004, 朝倉書店: p.21-24.
- 64) 監修/訳 岡部信彦. R-Book 2003 -小児感染症の手引き-, 米国小児科学会編. 2004, 小児医事出版.
- 65) 岡部信彦. 共通感染症の疫学 人の感染症と疫学, 共通感染症ハンドブック, 2004, 日本獣医師会.
- 66) 岡部信彦. 学校における予防接種 学校保健の動向, 2004. 日本学校保健会編/発行. p.39.
- 67) 岡部信彦, 木村幹男, 小泉信夫, 斎藤典子, 堀田国元編. 感染症の事典, 担当単著・インフルエンザ, 腎症候性出血熱, 痘瘡, ニパウイルス感染症, 感染症法とサーベイランス, 国立感染症研究所学友会 2004. 朝倉書店.
- URL・その他
- 1) 感染症情報センター. インフルエンザ関連死亡迅速把握システム 03/04年シーズン, 04/05年シーズングラフ. <http://idsc.nih.go.jp/disease/influenza/inf-rpd/index-rpd.html>
- 2) 感染症情報センター. インフルエンザ情報早期把握シ

感染症情報センター

- ステム, 2004 年度インフルエンザ統計情報, 2003 年 12 月 ~ 2004 年 5 月.
<http://www.flu.msi.co.jp/graph/>
- 3) 感染症情報センター. インフルエンザ流行レベルマップ, 2004 年 11 月 ~ 2005 年 3 月 (継続 6 月 28 日まで).
<http://idsc.nih.gov/disease/influenza/inf-keiho/index.html>
- 4) 感染症情報センター. S A R S (重症呼吸器症候群): WHAT'S NEW.
<http://idsc.nih.gov/disease/sars/index.html>
- 5) 感染症情報センター. 高病原性鳥インフルエンザ: WHO 感染確定症例数.
http://idsc.nih.gov/disease/avian_influenza/toriinf-case.html
- 6) 感染症情報センター. 高病原性鳥インフルエンザ: WHO 更新情報.
http://idsc.nih.gov/disease/avian_influenza/toriinf-who-up.html
- 7) 感染症情報センター. 高病原性鳥インフルエンザ: 新着情報.
http://idsc.nih.gov/disease/avian_influenza/index.html
- 8) 松岡静香, 多屋馨子, 新井智, 佐藤弘, 岡部信彦. 日本の定期/任意予防接種スケジュール 2004 年. 2004 年 3 月 26 日.
http://idsc.nih.gov/vaccine/dschedule/ImmJP_04.gif
- 9) 松岡静香, 多屋馨子, 新井智, 佐藤弘, 岡部信彦. 日本の定期/任意予防接種スケジュール 2005 年 (1 ~ 3 月).
<http://idsc.nih.gov/vaccine/dschedule/GIF/JP01-03.gif>
- 10) 松岡静香, 多屋馨子, 新井智, 佐藤弘, 岡部信彦. Immunization schedule, Japan 2004.
http://idsc.nih.gov/vaccine/dschedule/ImmEN_04.gif
- 11) 松岡静香, 多屋馨子, 新井智, 佐藤弘, 岡部信彦. Immunization schedule, Japan 2005 (Jan-Mar).
<http://idsc.nih.gov/vaccine/dschedule/GIF/JP01-03.gif>
- 12) 感染症情報センター. トリインフルエンザの分布図, 2004 年 2 月 2 日.
http://idsc.nih.gov/disease/avian_influenza/toriinf-map.html
- 13) 国立感染症研究所感染症情報センター. 重症急性呼吸器症候群 (SARS) に関する Q&A 「一般向け」・「医療従事者向け」, 2004 年 5 月 7 日.
<http://idsc.nih.gov/disease/sars/QA/QAver2.html>
- 14) 佐藤弘, 新井智, 北本理恵, 丹生隆, 荒木和子, 多屋馨子. 全国日本脳炎ウイルス抗体保有状況調査, 2004 年 6 月 30 日, 第 17 報: 12 月 1 日.
<http://idsc.nih.gov/yosoku/Smenu.html>
- 15) 中島一敏, 松館宏樹, 多屋馨子, 砂川富正, 上野正浩, 多田有希, 谷口清州, 田中政宏, 重松美加, 安井良則, 大日康史, 新井智, 佐藤弘, 大山卓昭, 山口亮, 鈴木葉子, 太田正樹, 岡部信彦, 千村浩 (鹿児島県), 相星壮吾 (徳之島保健所). わが国における風疹の現状とその対策, 2004 年 9 月 17 日.
<http://idsc.nih.gov/disease/rubella/0409kagoshi.html>
- 16) 感染症情報センター. インフルエンザ Q & A 「一般向け」・「医療従事者向け」, (平成 16 年度版), 2004 年 10 月.
<http://idsc.nih.gov/disease/influenza/fluQA/index.html>
- 17) 田中政宏, 多田有希, 多屋馨子, 岡部信彦. 風疹 Q & A, 2004 年 11 月 19 日.
<http://idsc.nih.gov/disease/rubella/041119QA.html>
- 18) 多屋馨子, 多田有希, 田中政宏, 岡部信彦. 風疹予防接種申込書・予診票 (任意接種用), 説明書, 2004 年 11 月 19 日.
<http://idsc.nih.gov/disease/rubella/041119/041119m.pdf>
- 19) 多田有希, 田中政宏, 多屋馨子, 岡部信彦. 風疹予防接種に関するガイドライン, 2004 年 11 月 19 日.
<http://idsc.nih.gov/disease/rubella/041119/041119guide.pdf>
- 20) 感染症情報センター. 鳥インフルエンザに関する Q&A, 2004 年 11 月 22 日.
<http://idsc.nih.gov/others/topics/flu/QA040401.html>
- 21) 佐藤弘, 新井智, 北本理恵, 丹生隆, 荒木和子, 多屋馨子. インフルエンザ HI 抗体保有状況 (速報), 2004 年 11 月 26 日, 第 3 報: 12 月 24 日.
<http://idsc.nih.gov/yosoku/Flumenu.html>

2. 学会発表

1. 国際学会

- 1) Arai, S., K. Tanaka-Taya, T. Takasaki, I. Kurane, N. Okabe,

- and Vaccine Preventable Disease Surveillance Group. 2004. Japanese encephalitis virus is still endemic in Japan. Fourth World Congress on Vaccines and Immunization, Tsukuba, Japan, 30 September - 3 October.
- 2) Henmi, Y., et al. 2004. A large hepatitis B outbreak in a nursery school, Japan. The 3rd TEPHINET Global Scientific Conference, Beijing, China, 8-12 November.
- 3) Imrie, A., J. Meeks, J. Newell, Z. Zhao, P. Kitsutani, and P. Effler. 2004. Identification of T cell responses directed against the dengue 1 NS5 protein. Pediatric Dengue Vaccine Initiative. First Regional Dengue Research Network Meeting, Bangkok, Thailand, October.
- 4) Kimura, M., M. Sakamoto, T. Adachi, and H. Sagara. 2004. Diagnosis of febrile illnesses in returned travellers using the PC software GIDEON. 5th Asia Pacific Travel Health Conference, Kuala Lumpur.
- 5) Masuda, K., et al. 2004. An Escherichia coli O157 outbreak in Japanese high school students, December 2003. The 3rd TEPHINET Global Scientific Conference, Beijing, China, 8-12 November.
- 6) Mori, N., et al. 2004. Using outbreaks in Japan to calculate the measles vaccine coverage needed to prevent transmission in school. The 3rd TEPHINET Global Scientific Conference, Beijing, China, 8-12 November.
- 7) Morikane, K., T. Konishi, M. Nishioka, Y. Harihara, and H. Kobayashi. 2004. Five-year experience of nationwide surgical site infections surveillance in Japan. The 14th annual meeting of the Society for Healthcare Epidemiology of America., Philadelphia, USA., April.
- 8) Morikane, K., T. Konishi, M. Nishioka, Y. Harihara, and H. Kobayashi. 2004. Nationwide surgical site infections surveillance in Japan. The 3rd East Asia Conference on Infection Control, Tokyo, Japan, November.
- 9) Ohkusa, Y. 2004. Policy Evaluation for the Subsidy for Influenza Vaccination in Elderly. World Conference of Vaccination and Immunization., Tsukuba, Japan.
- 10) Ohkusa, Y., M. Shigematsu, K. Taniguchi and N. Okabe. 2004. An Experimental OTC Surveillance in Japan. 2004 National Syndromic Surveillance Conference, Boston, USA, November.
- 11) Ohkusa, Y. and K. Taniguchi. 2004. Use of Antiviral Drug during a Pandemic-Possible Scenario and Mathematical Modeling. WHO informal consultation on influenza pandemic preparedness for countries with limited resources., Kuala Lumpur, Malaysia, June.
- 12) Shigematsu, M., T. Takasaki, K. Yamashita, M. Kimura, and N. Okabe. 2004. Imported dengue fever cases in Japan. 5th Asia Pacific Travel Health Conference, Kuala Lumpur.
- 13) Shigematsu, M. 2005. Communicable Disease Surveillances in Japan. 国立台湾大学公共衛生学院セミナー, 台北, 台湾, March.
- 14) Shigematsu, M. 2005. Communicable Disease Surveillances in Japan. 台湾行政院衛生署疾病管制局セミナー, 台北, 台湾, March.
- 15) Shigematsu, M and N. Okabe. 2004. Preparedness for emerging infectious diseases in Japan —lessons from SARS—. Sino-Japanese International Symposium on Public Health in the 21st Century, Hefei, China, August.
- 16) Tanaka-Taya, K. 2004. Measles epidemiology in Japan. International workshop for measles, Tokyo, Japan, 17 January.
- 17) Tanaka-Taya, K. and N. Okabe. 2004. Action plans to control measles and the future problems in Japan. Fourth World Congress on Vaccines and Immunization, Tsukuba, Japan, 30 September-3 October.
- 18) Tanaka, M., K. Taya, and N. Okabe. 2004. Measles Control in Japan. The 4th year evaluation of the measles eliminating program in Korea, Seoul, Korea, November.
- 19) Taniguchi, K. 2004. Infectious Disease Surveillance in Japan. Biological Weapon Convention, Geneva, Switzerland, July.
- 20) Taniguchi, K. 2004. Influenza surveillance. WHO/WPRO Influenza Training Course, Tokyo, Japan, May.
- 21) Taniguchi, K. 2004. Influenza surveillance in Japan. NIID/Taiwan CDC joint workshop on avian Influenza, Taipei, Taiwan, September.
- 22) Taniguchi, K. 2004. Preparedness and Response for Bioterrorism. International meeting for Bioterrorism, Seoul Korea, August.
- 23) Taniguchi, K. 2004. SARS/Avian influenza in Japan. JICWELS infectious Disease control training course, Tokyo,

Japan, October.

24) Ueno, K., K. Moriyama, R. Yamaguchi, K. Nakashima, J. M. Kobayashi, K. Taniguchi, and N. Okabe. 2004. Nosocomial outbreak of vancomycin-resistant enterococci infections, Japan. The 3rd TEPHINET Global Scientific Conference, Beijing, China, 8-12 November.

25) Yasui, Y., F. Fujii, K. Nakashima, K. Tanaka-Taya, and N. Okabe. 2004. The disease burden and immunization of varicella, mumps, measles, and rubella at nursery school, kindergarten, elementary school, and junior high school in Sakai-city. Fourth World Congress on Vaccines and Immunization, Tsukuba, Japan, 30 September - 3 October.

2.国内学会

1) 愛木智香子, 西尾治, 大瀬戸光明, 杉枝正明, 古屋由美子. 輸入生鮮魚介類のウイルス汚染実態調査成績について. 第53回日本感染症学会東日本地方会・第51回日本化学療法学会東日本支部総会・合同総会. 10月2004. 新潟県新潟市.

2) 秋山美穂, 愛木智香子, 西尾治, 福田伸治, 西田知子. 平成15年度に発生したノロウイルスによる食中毒事例について. 日本食品衛生学会第88回学術講演会. 11月2004. 広島県広島市.

3) 荒川香南子, 中野陽子, 山内昭則, 杉山明, 中山治, 西尾治. カキ及び養殖海域のノロウイルス汚染調査. 第25回衛生微生物技術協議会. 7月2004. 埼玉県さいたま市.

4) 新井智, 田原研司, 板垣朝夫, 松田裕朋, 辻正義, 石原智明, 岡部信彦. ダニ媒介性疾患の流行している島根県で確認された Anaplasmatidae の遺伝子. 第138回日本獣医学会学術総会. 10月2004. 北海道札幌市.

5) 古川友子, 森田耕司, 渡辺登, 伊藤健一郎, 他. 下痢原性大腸菌の *cesT* 遺伝子多型は *tir* 遺伝子型と一致する. 第77回日本細菌学会総会. 4月2004. 大阪府大阪市.

6) 古田隆久, 河津信一郎, 狩野繁之, 木村幹男, 審良静男, 渡辺直熙. マラリア原虫の Peroxiredoxin による Toll-like receptor 4 の活性化. 第74回日本寄生虫学会大会. 2005.

7) 古屋由美子, 原みゆき, 片山丘, 杉枝正明, 大瀬戸光明, 藤本嗣人, 宇宿秀三, 田中俊光, 西尾治. 輸入生鮮魚

介類のウイルス汚染状況について. 第52回日本ウイルス学会. 11月2004. 神奈川県横浜市.

8) 針原康, 小西敏郎, 森兼啓太, 西岡みどり. SSI サーベイランスの普及による周術期感染の減少を目指して. 第66回日本臨床外科学会総会. 2004. 岩手県盛岡市.

9) 平潟洋一, 有澤孝吉, 西尾治, 中込治. 長崎市のレストランで発生したノロウイルス G メキシコ株の集団食中毒. 第78回日本感染症学会総会. 4月2004. 東京.

10) 日谷明裕, 木村幹男. ドイツ語圏のマラリア予防ガイドライン. 第2回海外渡航者健康学会. 2004.

11) 日谷明裕, 子幡かおり, 木村幹男. 疥癬 院内感染例に対するイベルメクチンの使用経験. 第15回日本臨床寄生虫学会. 2004.

12) 日谷明裕, 木村幹男. ドイツにおける熱帯医学の資格認定制度. 第45回日本熱帯医学会大会. 10月2004. 東京.

13) 日谷明裕, 大日康史, 木村幹男, 中村哲也, 大友弘士, 名和行文. アトバコン/プログアニルによるマラリアの治療:「熱帯病に対するオーファンドラッグ開発研究」班のデータ解析. 第78回日本感染症学会総会. 4月2004. 東京.

14) 乾あやの, 十河剛, 藤澤知雄, 西尾治. ノロウイルスによる急性胃腸炎の臨床的特徴. 第36回日本小児感染症学会. 11月2004. 東京都文京区.

15) 伊藤健一郎, 山下和予, 吉川昌江, 野地元子, 齋藤剛仁, 岡部信彦, 寺嶋淳, 廣瀬健二, 渡邊治雄. 赤痢菌同定の問題点:アンケート調査結果. 第25回衛生微生物技術協議会. 7月2004. 埼玉県さいたま市.

16) 伊藤健一郎, 廣瀬健二, 岡部信彦. わが国における赤痢菌の誤同定についての緊急アンケート調査, 2003年. 第16回日本臨床微生物学会総会. 2月2005. 京都府京都市.

17) 逸見佳美, 佐藤弘, 砂川富正, 大山卓昭, 多屋馨子, 岡部信彦. 防衛医科大学校の医学生(1-6年)および研修医に対して行ったワクチン歴・既往歴の認識調査、および麻疹風疹抗体調査. 第45回日本臨床ウイルス学会. 6月2004. 大阪府豊中市.

18) 岩間真人, 神田隆, 西尾治. ノロウイルスによる食中毒等の防止に関する調査. 第63回日本公衆衛生学会総会. 10月2004. 島根県松江市.

19) 川戸美由紀, 橋本修二, 村上義孝, 谷口清州, 小坂健,

- 重松美加, 永井正規. 感染症発生動向調査に基づく検討 第2報 全国罹患数推計値の推移. 第63回日本公衆衛生学会総会. 10月 2004. 島根県松江市.
- 20) 木村幹男, 中村哲也, 大友弘士, 名和行文. 「熱帯病治療薬研究班(略称)」の過去および今後の3年間. 第45回日本熱帯医学会大会. 10月 2004. 東京.
- 21) 木村幹男. ワークショップ「わが国のマラリア予防ガイドライン作成に向けて」. スタンバイ治療. 第45回日本熱帯医学会大会. 10月 2004. 東京.
- 22) 木村幹男, 川上桂子, 浜田勝, 橋本迪子. 日本人渡航者におけるマラリア予防およびスタンバイ治療の実態と問題点. 第74回日本寄生虫学会大会. 2005.
- 23) 木村幹男, 中村哲也, 大友弘士, 名和行文. 熱帯病・寄生虫症の診療における「熱帯病治療薬研究班(略称)」の役割. 第74回日本感染症学会西日本地方会総会. 2004.
- 24) 木村幹男, 坂本光男, 足立拓也, 相楽裕子. GIDEON ソフトウェアによる発熱性輸入感染症の診断. 第78回日本感染症学会総会. 4月 2004. 東京.
- 25) 小西毅, 渡辺聡明, 北山丈二, 梅谷直亨, 森兼啓太, 深柄和彦, 名川弘一. 大腸外科手術における感染制御と感染危険因子に関する検討. 第104回日本外科学会総会. 4月 2004. 大阪府大阪市.
- 26) 増田和貴, 他. 中国における SARS 集団発生事例. 第63回日本公衆衛生学会総会. 10月 2004. 島根県松江市.
- 27) 松下秀, 加藤玲, 緒方和恵, 伊藤健一郎, 他. 腸管出血性大腸菌ベロ毒素遺伝子の LAMP 法を利用したタイピング試薬キットの検討. 第78回日本感染症学会総会. 4月 2004. 東京.
- 28) 三浦聡之, 木村幹男, 鯉淵智彦, 中村仁美, 遠藤宗臣, 小田原隆, 中村哲也, 岩本愛吉. 過去10年間の症例解析から明らかになった輸入マラリアの特徴と問題点. 第45回日本熱帯医学会大会. 10月 2004. 東京.
- 29) 宮川広実, 指原淳志, 山岸義晃, 天羽清子, 多屋馨子, 大園恵一, 山西弘一. 臍帯を用いて診断した先天性サイトメガロウイルス感染症児の検討. 第45回日本臨床ウイルス学会. 6月 2004. 大阪府豊中市.
- 30) 森伸生, 他. 都城保健所管内での麻疹流行調査とワクチンの効果の検証. 2003年宮崎県. 第8回日本ワクチン学会. 10月 2004. 北海道札幌市.
- 31) 森伸生, 他. 就学時の麻疹と風疹のワクチン接種率調査. 第63回日本公衆衛生学会総会. 10月 2004. 島根県松江市.
- 32) 森伸生, 砂川富正, 多屋馨子, 谷口清州, 岡部信彦. 宮崎県都城・北諸地域での麻疹流行時の小中学生における麻疹ワクチン接種状況の調査(2003年). 第107回日本小児科学会学術集会. 4月 2004. 岡山県岡山市.
- 33) 森兼啓太. サーベイランスで SSI を減らそう. 3M インфекションコントロールセミナー. 2月 2005. 東京.
- 34) 森兼啓太. たかが創感染、されど創感染. 国立がんセンター中央病院第3回院内感染対策セミナー. 2月 2005. 東京.
- 35) 森兼啓太. NNIS システムの将来. 国立看護大学校・認定看護師教育課程フォローアップ研修会. 11月 2004. 東京都清瀬市.
- 36) 森兼啓太. ICD による感染管理の実践とリーダーシップ. 宮城感染管理コントロール研究会・秋期感染症フォーラム. 10月 2004. 宮城県仙台市.
- 37) 森兼啓太. 高齢者の感染症 - その予防をめざして. 川越市保健所・高齢者感染症予防研修会. 11月 2004. 埼玉県川越市.
- 38) 森兼啓太. 標準予防策と血液曝露病原体への対応. 川越市保健所院内感染対策研修会. 2月 2005. 埼玉県川越市.
- 39) 森兼啓太. 院内感染対策の基礎と実践. 杏林大学病院院内感染防止講習会. 3月 2005. 東京都三鷹市.
- 40) 森兼啓太. 院内感染対策の基礎と実践. 東京医科大学院内感染対策研修会. 2月 2005. 東京.
- 41) 森兼啓太. 手術部位感染サーベイランスの実際. 東京慈恵会医科大学病院院内感染対策セミナー. 3月 2005. 東京.
- 42) 森兼啓太. 術後感染対策について. 東葛南部地域二次医療圏: 院内感染対策特別研修会. 1月 2005. 千葉県津田沼市.
- 43) 森兼啓太. 最近の感染管理の動向と外科手術部位感染サーベイランス. 横浜市立大学病院第16回感染対策懇話会. 3月 2005. 神奈川県横浜市.
- 44) 森兼啓太. 院内感染対策の基礎と実際について. 癌研究会付属病院院内感染対策講習会. 1月 2005. 東京.
- 45) 森兼啓太. SSI 防止対策. 石川県立中央病院院内感染対策セミナー. 1月 2005. 石川県金沢市.

感染症情報センター

- 46) 森兼啓太. SSI 防止のスタンダード：ガイドラインとサーベイランス. 第1回千葉SSI講演会. 3月 2005. 千葉県千葉市.
- 47) 森兼啓太. SSI 防止ガイドラインとSSIサーベイランス. 第1回埼玉SSI研究会. 12月 2004. 埼玉県さいたま市.
- 48) 森兼啓太. SSI サーベイランスに関する米国の現状. 第4回SSIサーベイランス研究会. 11月 2004. 愛知県名古屋市.
- 49) 森兼啓太. サーベイランスでSSIを減らそう!. 第9回東阪神院内感染症研究会. 1月 2005. 兵庫県尼崎市.
- 50) 森兼啓太. SSI サーベイランスによりSSIを減らそう!. 第11回大阪病院機能向上研究会. 11月 2004. 大阪府大阪市.
- 51) 森兼啓太. サーベイランスで院内感染を減らそう!. 第12回岐阜院内感染対策検討会. 3月 2005. 岐阜県岐阜市.
- 52) 森兼啓太. 院内感染のアウトブレイク対応. 第19回ICD講習会. 10月 2004. 新潟県新潟市.
- 53) 森兼啓太, 岡部信彦. 病院感染サーベイランスに関する意識調査. 第20回日本環境感染学会. 2月 2005. 兵庫県神戸市.
- 54) 森兼啓太. CDCの素顔 その知られざる実態. 第20回日本環境感染学会. 2月 2005. 兵庫県神戸市.
- 55) 森兼啓太. 手術における感染防止ガイドラインと知られざるCDCの姿. 第26回日本手術医学会総会. 11月 2004. 愛知県名古屋市.
- 56) 森兼啓太. 「ガイドラインに期待する」外科領域. 第53回日本感染症学会東日本地方会・第51回日本化学療法学会東日本支部総会・合同総会. 10月 2004. 新潟県新潟市.
- 57) 森兼啓太. 本邦における全国的手術部位感染サーベイランス. 第66回日本臨床外科学会総会. 2004. 岩手県盛岡市.
- 58) 森兼啓太. 院内感染とそのサーベイランス - 21世紀の日本の医療におけるキーワード. 第78回日本感染症学会総会. 4月 2004. 東京.
- 59) 森兼啓太. 手術部位感染の減少を目指して. 第104回日本外科学会総会. 4月 2004. 大阪府大阪市.
- 60) 森兼啓太. 手術部位感染とそのサーベイランス. 第104回日本外科学会総会. 4月 2004. 大阪府大阪市.
- 61) 森兼啓太. CDC最新情報. 臨床外科共同研究会リスクマネジメント分科会. 12月 2004. 大阪府大阪市.
- 62) 森兼啓太. 感染症サーベイランス. JICA/ACIH. 薬剤耐性病原体の実験室診断コース. 12月 2004. 熊本県熊本市.
- 63) 森兼啓太. 術後感染の減少を目指して. 複十字病院院内感染対策講習会. 9月 2004. 東京都清瀬市.
- 64) 森兼啓太. 新興・再興感染症の救急対応および院内感染対策. 豊田市消防本部医師・救急隊員研修会. 9月 2004. 愛知県豊田市.
- 65) 森山和郎, 他. 山梨県A病院におけるVRE集団発生事例. 第20回日本環境感染学会. 2月 2005. 兵庫県神戸市.
- 66) 村上義孝, 橋本修二, 川戸美由紀, 谷口清州, 小坂健, 重松美加, 永井正規. 感染症発生動向調査に基づく検討第1報 警報・注意報の発生状況と基準値変更の影響. 第63回日本公衆衛生学会総会. 10月 2004. 島根県松江市.
- 67) 中島一敏, 他. 保護者から得た幼児の麻疹罹患歴情報の信頼性評価. 第8回日本ワクチン学会. 10月 2004. 北海道札幌市.
- 68) 西田知子, 野田衛, 大瀬戸光明, 三上稔之, 篠原美千代, 入谷展弘, 植木洋, 川本歩, 秋山美穂, 西尾治. 市販生食用カキのノロウイルス汚染状況. 日本食品衛生学会第88回学術講演会. 11月 2004. 広島県広島市.
- 69) 西田知子, 野田衛, 三上稔之, 篠原美千代, 大瀬戸光明, 入谷展弘, 植木洋, 吉澄志磨, 岩田祐之, 西尾治. 3シーズンにおける国内産生食用カキのノロウイルスおよびA型肝炎ウイルス汚染状況. 第52回日本ウイルス学会. 11月 2004. 神奈川県横浜市.
- 70) 西村祐貴子, 矢野亜紀子, 西山優子, 奥田洋平, 金恵淑, 綿矢有佑, 木村幹男, 古田隆久. メフロキン耐性熱帯熱マラリア原虫の耐性化機構の解析. 第74回日本寄生虫学会大会. 2005.
- 71) 西尾治. ノロウイルスによる食中毒. 第36回日本小児感染症学会. 11月 2004. 東京千代田区.
- 72) 西山優子, 奥田洋平, 金恵淑, 綿矢有佑, 木村幹男. 熱帯熱マラリア原虫のメフロキン耐性化機構. 第73回日本寄生虫学会大会. 2004.
- 73) 登坂直規, 他. 2003年に沖縄県にて開始された麻疹全

感染症情報センター

- 数サーベイランスの有用性. 第 8 回日本ワクチン学会. 10 月 2004. 北海道札幌市.
- 74) 大日康史, 重松美加, 谷口清州, 岡部信彦. 平成 15 年度インフルエンザの流行期における患者数の迅速把握事業解析結果報告. 第 8 回日本ワクチン学会. 10 月 2004. 北海道札幌市.
- 75) 大日康史, 重松美加, 谷口清州, 岡部信彦. インフルエンザ関連死亡迅速把握システム報告の解析. 第 78 回日本感染症学会総会. 4 月 2004. 東京.
- 76) 大日康史, 重松美加, 谷口清州, 岡部信彦. 数理モデルを用いたの鳥インフルエンザ防疫策に関する考察. 第 138 回日本獣医学会学術集会公衆衛生学学科会. 9 月 2004. 北海道札幌市.
- 77) 大友弘士, 木村幹男, 吉田正樹, 佐藤文哉. わが国における熱帯熱マラリア治療の変遷. 第 78 回日本感染症学会総会. 4 月 2004. 東京.
- 78) 佐藤弘, 多屋馨子, 新井智, 荒木和子, 小田切孝人, 田代真人, 岡部信彦. 担当都道府県ならびに都道府県衛生研究所. 流行シーズン前インフルエンザ抗体保有率からみたインフルエンザ流行予測とワクチン接種に関する検討 (感染症流行予測調査事業より). 第 8 回日本ワクチン学会. 10 月 2004. 北海道札幌市.
- 79) 佐藤弘, 多屋馨子, 逸見佳美, 新井智, 砂川富正, 大山卓昭, 岡部信彦. 医科大学校の医学生および研修医における風疹・麻疹の抗体調査. 第 45 回日本臨床ウイルス学会. 6 月 2004. 大阪府豊中市.
- 80) 正田瑞恵, 新井智, 多屋馨子, 岡部信彦, 小西英二. 近年の日本におけるヒトの日本脳炎ウイルス自然感染状況. 第 52 回日本ウイルス学会. 11 月 2004. 神奈川県横浜市.
- 81) 重松美加. 新興・再興感染症の動向. 平成 16 年度 第 3 回健康危機管理保健所長等研修会. 11 月 2004. 埼玉県和光市.
- 82) 重松美加. 新興・再興感染症の動向. 平成 16 年度 第 4 回健康危機管理保健所長等研修会. 2 月 2005. 埼玉県和光市.
- 83) 重松美加. SARS の疫学と感染予防対策. 平成 16 年度 希少感染症診断技術研修会. 2 月 2005. 東京都新宿区.
- 84) 重松美加. SARS 事例からの教訓: 実験室内バイオセーフティの落とし穴. 第 4 回日本バイオセーフティ学会総会. 11 月 2004. 神奈川県横浜市.
- 85) 重松美加, 高崎智彦, 大日康史, 谷口清州, 岡部信彦. 輸入感染症としてのデング出血熱: 発生動向調査から. 第 53 回日本感染症学会東日本地方会総会. 11 月 2004. 新潟県新潟市.
- 86) 重松美加, 大日康史, 谷口清州, 岡部信彦. インフルエンザ関連死亡迅速把握システムの対策への応用 (03/04 シーズン). 第 63 回日本公衆衛生学会総会. 10 月 2004. 島根県松江市.
- 87) 重松美加, 吉田英樹, 大日康史, 岡部信彦. 細菌性赤痢のサーベイランス. 第 78 回日本感染症学会総会. 4 月 2004. 東京.
- 88) 菅原民枝, 大日康史, 他. 出雲における水痘・ムンプスの Disease Burden に関する調査研究. 感染症学会西日本支部総会. 11 月 2004. 島根県松江市.
- 89) 菅原民枝, 大日康史, 他. 水痘・ムンプスの Disease Burden に関する研究. 第 8 回日本ワクチン学会. 10 月 2004. 北海道札幌市.
- 90) 田村務, 西川眞, 西尾治, 鈴木宏. 急激に感染拡大したノロウイルス, Lordsdale 近縁種による急性胃腸炎の分子疫学的解析. 第 52 回日本ウイルス学会. 11 月 2004. 神奈川県横浜市.
- 91) 田中政宏. 世界における予防接種の動向; 日本への視点. 保健医療科学院保健所所長研修. 6 月 2004. 埼玉県和光市.
- 92) 田中政宏. 米国 CDC の活動. 保健医療科学院公衆衛生 (国際保健学) 修士課程講義. 11 月 2004. 埼玉県和光市.
- 93) 田中政宏. 海外における健康管理. 国際協力事業団長期専門家派遣前研修. 2 月 2005. 東京.
- 94) 田中政宏. 今後の予防接種事業のありかたについて. 埼玉県市町村予防接種担当者研修. 11 月 2004. 埼玉県和光市.
- 95) 田中政宏, 崎坂香屋子, 重松美加, 木村幹男, 谷口清州, 他. 国際社会と医療活動. 聖母大学看護学部 (国際看護学専攻科) シリーズ講義. 4-7 月 2004. 東京.
- 96) 谷口清州. 感染症サーベイランス. WPRO における感染症サーベイランス検討会. 2 月 2005. 北海道札幌市.
- 97) 谷口清州. SARS と鳥インフルエンザ. 三重大学白圭会. 6 月 2004. 三重県津市.

感染症情報センター

- 98) 谷口清州. 感染症集団発生への対応. 保健所長危機管理研修会. 9月 2004. 埼玉県さいたま市.
- 99) 谷口清州. 新興再興感染症の現状. 保健所長危機管理研修会. 8月 2004. 東京.
- 100) 谷口清州. 集団発生への対応. 保健所長研修会. 6月 2004. 東京.
- 101) 谷口清州. インフルエンザの最近の状況. 山形県感染症講習会. 3月 2005. 山形県山形市.
- 102) 谷口清州. 新興感染症に対するグローバルな対応. 感染症学術講演会. 7月 2004. 東京.
- 103) 谷口清州. 感染症に対するグローバルサーベイランスと対応. 感染研シンポジウム. 5月 2004. 東京新宿区.
- 104) 谷口清州. SARS と鳥インフルエンザ. 東京都感染症指定医療機関会議. 11月 2004. 東京.
- 105) 谷口清州. 最近の感染症の現状. 歯科衛生士講習会. 8月 2004. 東京.
- 106) 谷口清州. 感染症へのグローバルな対応. 滋賀県感染症対策研究会. 11月 2004. 滋賀県大津市.
- 107) 谷口清州. 新興再興感染症. 特別課程ウイルスコース. 10月 2004. 東京.
- 108) 谷口清州. 感染症対策における連携について. 第 25 回衛生微生物技術協議会. 7月 2004. 埼玉県さいたま市.
- 109) 谷口清州. 国際感染症と病院対策. 第 36 回日本小児感染症学会. 11月 2004. 東京都千代田区.
- 110) 谷口清州. 感染症サーベイランスの果たす役割. 第 45 回日本熱帯医学会大会. 10月 2004. 東京.
- 111) 重松美加, 谷口清州, 岡部信彦. 本邦におけるサーベイランスからみた輸入症例の記述疫学, 2000-2003 年. 第 45 回日本熱帯医学会大会. 10月 2004. 東京.
- 112) 谷口清州. 鳥インフルエンザとインフルエンザパンデミックに対する Preparedness. 第 52 回日本化学療法学会西日本支部総会. 12月 2004. 兵庫県神戸市.
- 113) 谷口清州. 人獣共通感染症におけるヒトのサーベイランスと対策. 第 63 回日本公衆衛生学会総会. 10月 2004. 島根県松江市.
- 114) 谷口清州. SARS と鳥インフルエンザ ~ サーベイランスから. 第 78 回日本感染症学会総会. 4月 2004. 東京.
- 115) 谷口清州. インフルエンザの最新情報. 第 9 回埼玉感染症研究会. 11月 2004. 埼玉県さいたま市.
- 116) 谷口清州. 海外での感染症の状況. 耳鼻科感染症研究会. 9月 2004. 三重県津市.
- 117) 谷口清州. 効果的なサーベイランスについて. 阪大微研感染研ジョイントシンポジウム. 2月 2005. 大阪府大阪市.
- 118) 谷口清州. 鳥インフルエンザとパンデミック. 高知県小児感染症研究会. 10月 2004. 高知県高知市.
- 119) 多屋馨子. 今話題の感染症 ~ SARS は? 鳥インフルエンザは? ~. 仙台小児科医会講演会. 12月 2004. 宮城県仙台市.
- 120) 多屋馨子. ワクチン情報最前線 ~ 日常診療に役立つワクチン情報 ~. 大阪小児感染症懇話会. 7月 2004. 大阪府大阪市.
- 121) 多屋馨子. 予防接種に関する知識 (正しい取り扱い等). 平成 16 年度検疫所看護師研修会. 11月 2004. 東京都千代田区.
- 122) 多屋馨子, 多田有希, 進藤奈邦子, 岡部信彦. 我が国の麻疹, 風疹に関する血清疫学調査ならびに患者サーベイランス ~ 感染症流行予測調査事業の紹介と国立感染症研究所感染症情報センターの取り組み ~. 成医会総会. 10月 2004. 東京都港区.
- 123) 多屋馨子. 子どもの冬の感染症について. 立川市育児教室講演会. 12月 2004. 東京都立川市.
- 124) 多屋馨子. 子どもの予防接種について. 立川市育児教室講演会. 3月 2004. 東京都立川市.
- 125) 多屋馨子. 感染症学, 免疫学の最前線. 感染症法改正. 第 1 回大阪大学 21 世紀 COE「感染症学・免疫学融合プログラム」. 9月 2004. 大阪府大阪市.
- 126) 多屋馨子. はしかゼロに向けて, 日本のはしか, 世界のはしか. 第 1 回日本小児科学会麻疹 (はしか) 公開フォーラム. 3月 2004. 東京都中央区.
- 127) 多屋馨子, 新井智, 佐藤弘, 荒木和子, 岡部信彦. 担当都道府県ならびに都道府県衛生研究所: 感染症流行予測調査事業より得られた近年の年齢別麻疹, 風疹, MMR ワクチン接種状況. 第 8 回日本ワクチン学会. 10月 2004. 北海道札幌市.
- 128) 多屋馨子. わが国の麻疹の現状と麻しんワクチン接種状況について. 第 12 回東日本外来小児科学研究会. 3月 2004. 神奈川県横浜市.
- 129) 多屋馨子. ウイルス感染症の迅速対応. シンポジウム「院内アウトブレイクを迅速に察知するための対処法」

- ICD の立場から. 第 17 回臨床微生物迅速診断研究会総会. 7月3日 2004. 大阪府豊中市.
- 130) 多屋馨子. 風疹の現状と対策. 第 20 回学校医部会研修会. 10月 2004. 神奈川県横浜市.
- 131) 多屋馨子. 最近の麻疹の流行とワクチン接種の問題点. 第 31 回日本小児臨床薬理学会. 9月 2004. 静岡県静岡市.
- 132) 多屋馨子, 鈴木葉子, 大日康史, 逸見佳美, 鈴木里和, 新井智, 大山卓昭, 岡部信彦. わが国の手足口病, ヘルパンギーナ, エンテロウイルス感染症の重症化例に関する検討. 第 36 回日本小児感染症学会. 11月 2004. 東京都千代田区.
- 133) 多屋馨子. ワクチンに関する最近の話題. 予防接種の最新情報と vaccine preventable disease の国内発生状況. 第 45 回日本臨床ウイルス学会. 6月 2004. 大阪府豊中市.
- 134) 多屋馨子, 新井智, 森伸生, 砂川富正, 岡部信彦. 国内麻疹サーベイランス情報から得られたわが国の麻疹の現状と対策. 第 45 回日本臨床ウイルス学会. 6月 2004. 大阪府豊中市.
- 135) 多屋馨子. 最近の感染症の実態とその予防ワクチン. 第 51 回日本小児保健学会. 10月 2004. 岩手県盛岡市.
- 136) 多屋馨子. インフルエンザ感染症の最近の話題. 第 56 回北摂小児科医会. 11月 2004. 兵庫県西宮市.
- 137) 多屋馨子. 感染症について ~ 新興感染症に対する Preparedness ~. 第 108 回東京都保健医療学会. 11月 2004. 東京都文京区.
- 138) 上野正浩, 他. 1999 年 9 月以降の感染症サーベイランス施行後における先天性風疹症候群の状況. 第 8 回日本ワクチン学会. 10月 2004. 北海道札幌市.
- 139) 上野久美, 他. Y 県 Y 市 N 病院における V R E 院内感染実地疫学調査. 第 20 回日本環境感染学会. 2月 2005. 兵庫県神戸市.
- 140) 上野久美, 砂川富正, 大山卓昭, 谷口清州, 岡部信彦, 山本昭夫, 藤本嗣人, 徳嶺進洋. H 県 I 市周辺における成人を中心とする急性髄膜炎・脳炎症例の集積. 第 45 回日本臨床ウイルス学会. 6月 2004. 大阪府豊中市.
- 141) 山下育孝, 大瀬戸光明, 近藤玲子, 豊嶋千俊, 西尾治. 急性胃腸炎の散発例及び集団発生例から検出されたノロウイルス(NV)の分子疫学. 第 52 回日本ウイルス学会. 11月 2004. 神奈川県横浜市.
- 142) 山崎貢, 松本昌門, 秦眞実, 伊藤健一郎, 他. 腸炎ビブリオの耐熱性溶血毒類似毒 (TDH-related hemolysin: TRH)陽性株の分布及び TRH 遺伝子の塩基配列解析について. 第 78 回日本感染症学会総会. 4月 2004. 東京.
- 143) 安井良則, 藤井史敏. BCG 接種に関する堺市の対応について. 近畿小児科学会. 2005.
- 144) 吉田英樹, 他. バンコマイシン耐性腸球菌 (V R E) 院内感染事例の疫学調査. 第 78 回日本感染症学会総会. 4月 2004. 東京.
- 145) 吉川博子, 金沢宏, 木村幹男, 小川基彦. アフリカから帰国後, 発熱, 発疹で発症した地中海紅斑熱/African tick-bite fever の一症例. 第 78 回日本感染症学会総会. 4月 2004. 東京.